地域に貢献する
ロシア語人材育成につながる
教育課程編成を展望した、

ロシア語学習指導案・評価法確立のための基盤研究

Обучение русскому языку в японских учебных заведениях

平成 29 年度　文部科学省外国語教育強化地域拠点事業

事業成果最終報告書

2018 年 3 月 31 日

平成 29 年度

文部科学省外国語教育強化地域拠点事業

ロシア語班 事業成果最終報告書

地域に貢献する
ロシア語人材育成につながる
教育課程編成を展望した、

ロシア語学習指導案・
評価法確立のための
基盤研究

平成 30 年（2018 年）3 月

目　　次

外国語教育強化地域拠点事業 ロシア語班 —— 1 年間の軌跡 …… 林田　理恵　1

実施体制の概要　図 1 …… 18

第 1 部　各校　取組みの記録

北海道札幌丘珠高等学校（研究拠点校）

札幌丘珠高校でのロシア語教育の歩み …… 遠藤　雅公　21

北海道旭川南高等学校

北海道旭川南高等学校でのロシア語授業——現状と取り組み …… 鈴木　桃子　29

北海道札幌国際情報高等学校

北海道札幌国際情報高校でのロシア人受け入れ、交流紹介
——2017 年 6 月 12 日実施の交流報告—— …… 依田　幸子　33

青森県立青森南高等学校（研究拠点校）

ロシア語で青森紹介～ペテルブルグの高校生へ～
——青森県立青森南高等学校・外国語科３年—— …… 工藤　綾華　35

関東国際高等学校（研究拠点校）

「東京オリンピック・パラリンピックに向けた言語運用」
——関東国際高等学校・2017 年取り組み—— …… 永沼栄理子　39

富山県立伏木高等学校（研究拠点校）

平成 29 年度外国語教育強化地域拠点事業
——富山県立伏木高等学校の取り組み—— …… ボンダレンコ・オクサーナ　45

取組事例 …… 53

第２部　評価・今後の展望

プロジェクト型授業に見られる「学び」の評価について
——客観的評価と CAF 分析—— …… 横井　幸子　61

ロシア語教育の高大連携の現状と課題
——札幌大学の事例をもとに—— …… 高橋健一郎　67

日露で互いのことばを学ぶクラスをつなぐ …… 水口　景子　71

Посещение уроков и их анализ как путь
к повышению уровня преподавания …… Казакевич Маргарита　75

外国語教育強化地域拠点事業 ロシア語班 ―― 1年間の軌跡

研究主任　**林田　理恵**
（大阪大学）

Ⅰ．日本の高等学校におけるロシア語課程の現状

表1は，日本の高等学校でロシア語課程を開設している学校数･履修者数の2005年～2016年の推移である．表からもわかるように，年度ごとに状況は流動的ではあるが，開設学校数･履修者数ともにこの約10年，ほぼ横ばい状態にある．また，中国語やフランス語，韓国･朝鮮語など，英語以外の外国語科目上位6グループの中に入ってはいるものの，上位5位までの言語に比べると，ロシア語の開設学校数･履修者数は極端に少ない（表2）．大学のロシア語教員など，ロシア語関係者の間ですら，高等学校でロシア語科目が存在することはさほど認知されていないという現実がある．

表1　ロシア語課程開設学校数･履修者数の推移（高校）*1

	公立		私立		総数	
	開設学校数	履修者数	開設学校数	履修者数	開設学校数	履修者数
2005	20	350	5	112	25	462
2007	24	400	15	144	39	544
2009	17	456	4	111	21	567
2012	18	425	5	124	23	549
2014	23	628	4	167	27	795
2016	20	559	5	179	25	738

*1 数値は文部科学省初等中等教育局国際教育課が隔年に発表する報告「高等学校等における国際交流等の状況について」中のデータに基づいている．

このように，言ってみれば「細々と」した状況ではあっても，高校でのロシア語学習の灯が消えずに継続してきた背景には，北海道や日本海沿岸など(1)，開設校を抱える地域における地道な日ロの経済･人的交流活動の存在がある．林田2014でも詳しくふれたが，地理的･経済的にロシアと常に深い関係にある北海道は言うまでもないが，例えば「みちのく銀行」など地元経済界の「ロシア語学習校の設置を」という要請でコースを開設した（青森南高校）青森や，全国一のロシアからの北洋材輸入を誇る富山など，地域がもつロシアとの緊密な関係が高校ロシア語の継続を少なからず後押ししていることは間違いない．北海道や北陸地域では行政単位で交流プログラムも実施されており，「北方四島青少年受入･訪問事業」などには全国からロシア語を学習する生徒たちが集う．

表2　外国語教育の実施状況（高校）
―開設学校数･履修者数 *2
（2005年度，2016年度カリキュラム）

	2005年		2016年	
	開設学校数	履修者数	開設学校数	履修者数
中国語	553	22,161	504	17,210
韓国･朝鮮語	286	8,891	328	11,137
フランス語	248	9,427	209	7,912
ドイツ語	105	4,198	102	3,542
スペイン語	105	2,688	107	3,244
ロシア語	**25**	**462**	**25**	**738**

*2 同上データ

ただ，すでに見たように，消えないまでも数的に目立って増えることもなく，またほとんどの

(1) 高等学校でロシア語が開設されている地域は，現在のところ，関東以外では北海道･青森･秋田･山形･新潟･富山に限定されている（本書第2部，水口氏の論稿を参照）．

高校で週1~2時間程度の選択科目として[2]，これまた「細々と」開講されているという状況が長年続いており，課程を充実させようといった動きもなかなか見られない．ロシアとの経済的･人的関係がストレートには地域のロシア語学習のニーズにつながっていかないのである．

今回の文科省･拠点事業への参加は，上記のような高校ロシア語課程が置かれている現状を客観的に分析し，こういった状況を作り出している要因を探る良いきっかけをわれわれに与えてくれた．また，そもそも日本の中等教育課程で「ロシア語学習」が必要なのか，仮に必要だとして，それにはいかなる根拠があるのか，またどういった形と内容を持つべきなのか，「高校ロシア語学習」が先にありきではなく，より根本的な問いかけを設定して，プロジェクトの1年が出発した．

以下，今回の文科省「外国語教育強化地域拠点事業」のねらい，それに対するわれわれなりの評価と問題点･課題のあぶり出しを試みる．その上で，拠点事業･ロシア語班1年間（2017年4月～2018年3月）の取り組み内容をふり返り，総括と今後の課題を展望する．

Ⅱ．文科省「外国語教育強化地域拠点事業」とは？

II-1. 文科省が意図するところ――次期学習指導要領改訂の文脈から

「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため」[3]文科省は2020年度に導入を開始する新学習指導要領で小学校5, 6年英語教科化を決めた．2014年度から3年間展開されてきた「英語教育強化地域拠点事業」は，小学校英語教科化の実施など，新学習指導要領のコンセプトに沿った外国語教育を実現するため，全国小中高拠点校での実験的取り組みを支援･検証することを目的として展開された事業である．今回，われわれが高等学校ロシア語として参加した「外国語教育強化地域拠点事業」は，「英語教育強化地域拠点事業」の継承事業として，「英語以外の外国語」も拠点地域に加えた形で，新たに2017年3月に1年間の期間を設定して公募が開始された．

次期学習指導要領改訂については，すでに多くの議論がなされており，詳しくふれることはしないが，1)「よりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有」し，その実現を図るための「社会に開かれた教育課程」の実現，2)「何ができるようになるのか」という目的･見通しを教員や子供らが共有し，その目的に必要な資質･能力の育成という方向で「何を学ぶか」を検討，3)「どのように学ぶか」の柱，「主体的･対話的で深い学び（「アクティブ･ラーニング」）」を実現させるため，授業において工夫改善を重ねていくことの必要性，といった点を，われわれなりの総括に関係する改訂の柱として挙げることができるだろう[4]．

まず，2)「何ができるようになるのか」，3)「主体的･対話的で深い学び」という内容は，これまでロシア語教育の中でわれわれが提唱してきた「活動」理論に基づく学び，「内容を重視」した学び[5]と，一見，そのコンセプトの多くが重なるように思える．

実際，従来の「何を学ぶか」を中心とした知識偏重型の内容を修正し，到達点として「何ができるようになるのか」を掲げた今回の改訂は，その趣旨としては大きな前進と言える．

ものごとの理解，学びは，言うまでもなく知識を与えられただけでは成立しない．対象への働

(2) 関東国際高校（外国語科･必修科目），富山高等専門学校（国際ビジネス科･選択必修），早稲田高等学院（1･2年次のみ週3）の3校でのみ週3時間以上の授業が開設されている．
(3) 「外国語教育強化地域拠点事業公募要領」2017年3月．
(4) 「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（素案）のポイントー参考資料」文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程企画特別部会（第19回）配布資料，2016年8月．
(5) 「活動」理論に基づく学び，「内容を重視」した学びの詳細については，林田2002，横井･林田2013を参照されたい．

きかけ――「活動」を通して，ものごとの理解，学びははじめて成立する．そして私たちは「活動」において世界とさまざまな関係を実現する中，「活動」それ自体を修正，変化させながら，自らの対象についての理解，学びを刻々変化，発展させていく．「何ができるようになるのか」とは，どのような「活動」ができるようになるのかを意味し，そこに目的･見通しを持つことは，学びのそもそもの第1歩だと言える．

「あらゆる活動が動機に基づく――欲求が生じ …… 動機となったとき，そこから活動が出発する」（A. H. Леонтьев 1981: 312）．学ぶことへの興味･関心，見通しを持った取り組みを重視する「主体的学び」も「活動」理論の文脈におくとき，その明確なねらいが見えてくる．

そして「情動の共有空間」を支えとした相互交渉の営みこそが，人間の中に「ことば」を育み，醸成させ，その「ことば」を媒介として人間は自己意識を形成し，外界を客観的に対象化，分析し得る力――高次精神機能を機能させ得るのだということを思い起こせば，「学び」の原点に「協働」と「対話」をおくことは自明のこととなる．その意味でようやく今回，「管理者としての教師ーそれを受動する学習者」という従来の教室構図を問い直し，「教え･学び」の本質に立ち返った改訂がなされたと言えるだろう．

II-2. 次期学習指導要領改訂の問題点，課題

II-1で次期学習指導要領改訂のポイントが，大枠としては肯定的に評価できるということをみてきた．しかしながら，それらがひとたび外国語教育という次元で具体化されるとき，残念ながらそこにはいくつもの問題点，課題が浮かび上がってくる．

例えば，高等学校･外国語教育においては，「日常生活や社会生活に関する幅広い話題の概要･要点を的確に理解し，情報や考えなどを適切に伝え合うことができる」ことがその【目的の設定･理解例】として挙げられているが，そもそも人は「何のために」話題を理解し，伝え合うことが必要なのか，ということは語られない．

ことば活動はそれを組み込む，より上位の活動が前提となるとき，はじめて意味のある目的をもった活動として成立する，という点が抜け落ちているのである．「発話は原則として何かのために出現する．われわれが話すのは，何らかの結果に到達せんがためである．…… ことばはより上位の活動の中に構成部分として組み込まれるのである」（A. A. Леонтьев 1974: 26）．コミュニケーション活動そのもの，そこでの理解や伝え合いは，それを必要とする上位の活動が存在しなければ，もはや活動とは言えなくなる．

上記の点が明確にされないまま，学校現場には「話題の理解･伝え合い」が目的として持ち込まれ，そこでは授業でコミュニケーション活動を成立させることだけが至上命題として理解される．コミュニケーション活動を成立させるためだけに，話し合いのテーマが設定され，交流イベントが組まれる．そのコミュニケーションは何をするために必要なのか，ということは問われず，当然，学習者にも見えない．ましてや学習者の自発的な欲求･動機はそこにはそもそも存在せず，ものごとの「理解･学び」を促す「活動」としては残念ながら機能しないという現実がある．

多くの高校で行われている交流イベントについて，林田2014で「非日常の限られた時間の中でのみ異なる国の人々と交わりを持つ」ことの限界性を指摘したが（林田2014: 65–66），先へのつながりを持たない，その日だけの「交流のための交流」であっては，そこに目的･見通しをもった「主体的学び」も，自らの問いの設定と課題の追究，課題解決への取り組みとしての「深い学び」も成立しないのである．

さらに，教員と生徒などの協働と対話を意味する「対話的学び」も，授業の現場ではその本質が理解されることなく，単に同じ時間で何かの作業や話し合いをさせる，といった内容にすり替

えられてしまう．

「協働」と「対話」という相互作用が「学び」に不可欠なものとなるには，一方で，生物の共存在を本能的につかさどる「情動の共有」空間がなければならないし，他方，バフチンの言うところの自己とは異質なものとしての「他者のことば」がなければならない（Бахтин 1975: 88−107）．

単に同じ時空間に存在していても，それぞれが互いにその場の出来事に興味･関心，目標をもたなければ，その状況の理解，認識の前提としての「情動の場」はそもそも成立しない．そして同調運動を支える環境としての「情動の共有」によってはじめて，他者やとりまく状況との相互作用が発動するのである．

また「対話」とは単なる話し合いではなく，「ことば」を媒介とした他者と自己とのやり取り，他者と自己との差異･矛盾をゆらぎとしてとり込み，そのことで自己の意識を確立しながら，その変容を引き受けるというプロセスである．人間の高次精神機能はまさにそのような対話的相互作用を通して発達していくのである．教室内の話し合いでしばしば観察される，一方的な指令や逆に無反応な場への埋没からは，相互性の創造，変化･力の源としての「異なり」との衝突，葛藤は生まれないし，体験･活動を再解釈し，成長の礎として自己へ内化させるという展開は望めないのである．

「他者の視点」において水平的ずれのみならず，階層的なずれが必要であるという点もしばしば見落とされる．「…… 子どもは協力してもらうことで，つねに独力でよりも多くのことをすることができ」（Выготский 1996: 248）「協力してもらうことで高度の知的水準へと向上する可能性，子どもができることからできないことへ模倣を通じて移行する可能性」（Выготский 1996: 250）は，複数の階層的ずれをもつ視点のインタラクションから生まれる．教師の「場の協力者」としての適切な援助，認知的熟達度の異なる学習者が相互に教え，学び合うという構図を作り上げる努力が必要なのである．

単なる「ことば活動」ではない，社会や生活に根ざした具体的目的を持つ活動が設計されているのか，それは学習者の欲求･動機に支えられているのか，そして単なる「伝達」的なインタラクションの場ではない，目的実現に向けて知恵を出し合う，問題解決への道筋が展望されているのか，そのプロセスで教師･学習者･とり巻く状況が一体としてどのように変容し，どのような新たな気づき，創造があったのか．

こういったことの総体が教室内の実践で検証されて初めて，「何ができるようになるのか」を意識化した学び，「主体的･対話的で深い学び」が実現するのである．

最後に，より本質的な問題として考えなくてはならないのが，1)で掲げられた点である．「よりよい社会を創るという理念」とは誰にとっての「よりよい社会」なのか．小学校5, 6年での英語教科化が決められたことに，外国語教育という次元で語られる「よりよい社会」のありようが見えてくる．今回の「外国語教育強化地域拠点事業」が，すでに3年間に亘って展開された「英語教育強化地域拠点事業」の継承として，1年の期限付きではるかに出遅れてスタートしたことからもわかるように，まずは「英語教育」の強化･変革が国における施策の最優先事項としてあり，「その他の外国語」はいわばつけ足しにすぎない．

指導要領で謳われる「グローバル化に対応した人材」とは，「経済のグローバル化」に対応する人材，ビジネスでの共通語として君臨する英語を使える人材の育成という意味にすり替わってしまっている．そこには英語以外の言語や文化へのリスペクト，多言語･多文化共生社会実現へ向かおうという姿勢は希薄であり，今回の事業でも「その他の外国語」について具体化された施策は残念ながら存在しない．

Ⅲ．外国語教育強化地域拠点事業・ロシア語班１年間の軌跡

「社会に開かれた」教育課程という文脈で中等教育における「その他の外国語」教育ということを問い直すとき，そこに何が見えてくるのか，社会や生活に根ざした具体的目的を持つ「活動」を教育課程そのものの中心軸として据えることができないか.

ロシア語教育の現状や，新学習指導要領に対するわれわれなりの問題意識を踏まえたこのような問いかけから，外国語教育強化地域拠点事業･ロシア語班は 以下の高等学校を強化地域拠点学校として指定し，その活動をスタートさせた.

強化地域拠点学校

北海道札幌丘珠高等学校	校長名	林　祐司
青森県立青森南高等学校	校長名	福士　順一
関東国際高等学校	校長名	James Harman
富山県立伏木高等学校	校長名	山端　将介

以下，研究開発課題や組織構成など事業実施計画の内容，1年間の活動の概要を紹介する．事業実施計画･進捗状況･課題の各項目は林田理恵，横井幸子（大阪大学研究担当）が執筆した．また，第1部「各校　取り組みの記録」では，研究拠点校4校におけるプロジェクトで開発された新指導案に基づく取り組みや高大連携事業について，各校研究担当者の詳細な記録がまとめられている．さらに，拠点校以外で本プロジェクトの活動に参加した北海道旭川南高等学校（鈴木桃子講師），北海道札幌国際情報高等学校（依田幸子教諭）2校の活動記録も紹介している．第2部では本事業の総括･評価，今後の展望について，大阪大学研究担当の横井氏，運営指導委員4名から寄せられた論稿を掲載している．

Ⅲ-1. 研究内容

(1) 研究開発課題

地域に貢献するロシア語人材育成につながる教育課程編成を展望した，ロシア語学習指導案・評価法確立のための基盤研究

(2) 研究の概要

新しい外国語指導要領の目標を踏まえ，各拠点校におけるロシア語教育目標を明確化し，地域に貢献するロシア語人材の育成につながる教育課程を展望した，適切なロシア語学習指導案･評価法を確立するため，各拠点校で実践的研究を行う.

日本の中等教育機関におけるロシア語教育は，それぞれの学校によりカリキュラム等，教育体制が異なり，また地域が必要とするロシア語人材も一様ではない．このような現状を踏まえ，各学校の教育体制･習得目標レベル，さらには多様な各地域のニーズに柔軟に対応し，また地域との連携を視野に入れたロシア語学習指導案･評価法を，各拠点校における実践的取り組みを踏まえて開発していく．特に，地域･行政と連携したボランティア活動等を積極的に学習に取り込むなど，学習者のロシア語を使った主体的な体験活動を中心とした，5領域総合型の学習指導案･評価法の具体的デザイン開発に向け，実践的研究を展開する.

(3) 現状の分析と仮説等

【現状の分析と研究の目的】

近年，日本とロシア連邦･NIS諸国との経済関係は急速に緊密化し，国内でも，ビジネス･労働･観光目的で来日するロシア連邦･NIS諸国の人々の数は増加の一途をたどっている．また，ロシア語を母語とする在住「外国人」を多数抱える自治体も多くあり，「ことばの障壁」をクリアできる人材育成が求められている．

一方，国内には選択外国語としてロシア語を履修できる高等学校が存在するが，現状では各教育機関の間でカリキュラムや到達目標等の情報のやり取りは少なく，また，学習指導法や授業運営での経験交流，教材開発等での大学との協力関係も長年存在しなかった．2008年以降，大学レベルでは，ロシア語教育専門機関である大阪大学外国語学部ロシア語専攻が，科学研究費助成事業により「国際基準」に準拠したロシア語総合試験開発を行い，到達度評価システムに基づくカリキュラム策定･成績評価等の導入を開始している．また，2011～2015年には科学研究費助成『大学間，高等学校－大学間ロシア語教育ネットワークの確立』(研究代表者：林田理惠（大阪大学）基盤研究(B)）の展開により，国内ロシア語教育機関間でそれぞれの教育体制，カリキュラム等の現状･問題点が相互共有され，カリキュラム策定や教材，指導法，評価システム等に関する情報ネットワーク確立の道筋が作られた．さらに科学研究費助成事業『高等学校のロシア語教員に関する縦断的研究：教師養成のための支援体制の確立』(研究代表者：横井幸子（大阪大学)，基盤研究 (C)，2013～2015年）によって，高校ロシア語教育の現状分析が進められ，高大教員の実践的共同研究の基礎が作られている．また，国際文化フォーラムが立ち上げた高大のロシア語教育関係者が参加するプロジェクトにより，2015年3月には『外国語学習のめやすーロシア語教育用』も完成している．

これまでの成果により，教育機関の間ではカリキュラム等の情報交換が活発化し，学習･指導方法や授業運営での経験交流，教材開発等での協力関係が構築されてきているが，社会的要請に応え得る具体的人材育成という点では，未だ有効な教育課程が十分に整備されているとは言い難い．特に高等学校における選択ロシア語科目では，授業時間総数が少なく，明確な具体的到達度目標を設定することが困難で，学習者自身も学ぶことの意義や学習の成果を実感することが難しく，教室内での具体的授業運営に関して，それぞれの機関で未だ多くの問題点を抱えているのが現状である．

今回の研究では，以下の諸点を具体的な目的とする．

1） ロシア語教育実施校が複数ある地域に拠点校をつくり，各教育機関において，それぞれの地域に貢献できるロシア語人材育成を視野に入れた教育課程編成を目指し，拠点校ごとに独自のロシア語学習指導案を拠点校における実践的取り組みを踏まえて開発していく．

2） 学習者の学びを内容と言語の両面から評価し，また形成的評価と総括的評価を有機的に統合した評価法の開発を進める．

3） 高大のロシア語教育関係者による実践的共同研究の基盤整備を行い，授業改善や実践的指導能力向上を目的とした教員間の相互支援体制を構築する．

4） 各地の大学のロシア語教育専門家を運営指導委員に迎えることにより，大学から高校への出張授業やその単位化や，アドバンストプレスメント(Advanced Placement, AP)へとつなぐ大学での公開授業開設等，高大接続を展望した共同プログラム開発の検討を行う．

【研究仮説】

１）の目的達成に向け，

① 各拠点校の現状のロシア語教育実施状況（習得目標レベル，学習時間数，教材，教員の状況等）を調査，分析し，② 各拠点校が置かれている地域のロシア語人材に対する具体的ニーズを調査，③ ①, ②を踏まえ，各拠点校の実情に合わせた柔軟なロシア語学習指導案の原案を作成する．特に，在留外国人や外国人観光客サポートなどのボランティア活動を，学習の段階的成果として学びの中に積極的に取り込むことができるような，**5領域総合型の指導案，授業デザイン開発**を心がける．こうした**地域･行政と連携した協同活動，具体的な問題解決活動を授業活動として展開**することで，**生きたロシア語を使った主体的･対話的学びを実現させるプログラム開発**が可能となる．また，ロシアやNIS諸国の人々と，単なる交流ではなく，彼らの課題解決の一助となるという形での交わりを通して，**学習者に相手の文化･考え方に対するより深い理解を形成**することができる．

２）の目的達成に向けては，

指導案に沿った学習の各段階で，単に言語面のみならず，生徒たちによってなされる活動が，生活のさまざまな領域において，どの程度，目標を達成しているかどうか，**内容面からもチェックができるシステムを開発**し，**学習者自身の自己評価と教師からのフィードバックなどの積み重ねによる継続的評価システム**を作り上げる．そのことで，単なる知識･技能の習得にとどまらない，**思考力･判断力を伴う課題解決能力としてのコミュニケーション能力を評価**することが可能になり，また学習者に「ロシア語を使った社会生活における課題解決能力の習得」という学習目標を明確な形で自覚させることができる．

３）の目的達成に向けて，

高校と大学教員が共同で**カリキュラム･指導案開発のための実践研究･ワークショップ**，授業改善･指導能力向上を目的としたきめの細かい，体系だった**現職教員研修等を組織**する．そのことで，高校側と大学側双方から実践的･専門的知識の体系だった共有･統合･展開プロセスが期待でき，大学側から高校側への一方向的支援ではなく，**高大間の相互支援体制を確立**することができる．

４）の目的達成に向け，

他教科ですでに実施されている高大連携活動の実態情報を収集･整理し，高大接続，入試制度改革に関する国内外の議論･先行研究を精査･分析し，研究組織内で情報の共有を図る．そのことにより，**ロシア語課程における出張授業･APを射程した公開授業，また，入学者選抜方法にCEFR等に準拠した外部検定試験を活用する可能性**等について，実質的な検討を開始することができる．

【研究成果の評価方法】

１．学習者の授業内での発表等を学習者言語データとして抽出し，第2言語能力を複雑さ (Complexity)，正確さ (Accuracy)，流暢さ (Fluency) から評価する**CAF分析** (e.g., Larsen-Freeman, 2009, *Applied Linguistics*) **を用いて，学習者の言語習得過程の多角的評価**を実施する．

２．本事業の研究授業活動に従事した**教員を対象に**，開発された指導案，評価法について，実践の過程でどのような問題が起こり，どのような課題が見えてきたか，また成果点等について**参与観察とインタビューによる質的調査**を行う．

３．授業活動に連携･協力した**行政等の地域組織担当者に対し**，学習者のロシア語を使った体験活動の過程でどのような問題が起こり，どのような課題が見えてきたか，また成果点等について**インタビューによる質的調査**を行う．

４．**ТРКИ(Test of Russian as a Foreign Language) A1-A2レベルに準拠したテスト**を実施し，各拠点校学習者の**5領域**（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り)」「話すこと（発表)」「書くこと」）**におけるロシア語能力を客観的に測定**する．

(4) 研究計画・進捗状況・課題

【研究計画】

１．高等学校における外国語教育の方向性の共有

研究課題に取り組む大前提となる，平成29年度に改訂される高等学校の学習指導要領について理解を深める．

(1) 新学習指導要領の特徴である3つの柱（①知識や技能，②思考力，判断力，表現力，③学びに向かう力，人間性を育てるべき資質･能力）

(2) 外国語学習の目標としての5つの領域（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り)」「話すこと（発表)」「書くこと」別の目標設定）

２．ロシア語学習指導案・評価法開発に向けての現状分析と課題の明確化

各拠点校が所在する地域とロシアとの関連，地域に必要なロシア語人材，各拠点校のロシア語教育実施状況（習得目標レベル，学習時間数，教材，教員の状況等）を整理･分析したうえで，今回開発するロシア語学習指導案･評価法のアウトラインを決定する．そこでは，ロシア語を使った，地域のニーズに即した社会参加の活動を各学期の学習目標とし，その目標を実現するために，言語知識の理解･言語運用能力の習得･文化背景知識の理解のそれぞれの項目をどのように配置すればよいのか，という点に留意した指導案作りが求められる．

３．ロシア語学習指導案・評価法の開発－試験的実施

２で明確になった課題を踏まえ，それぞれの拠点校の研究担当教員が，研究主任および運営指導委員のサポートを得てロシア語学習指導案･評価法の原案を作成，試験的実施を開始する．

４．各拠点校における新しい指導案に基づくロシア語授業活動の相互見学

拠点校における新しい指導案に基づくロシア語授業活動，また各学期末に学習成果として実施する，学習者のロシア語による社会体験活動等を互いに見学する．見学後に研究担当者間で指導案の内容，評価の実施状況･評価内容について，問題点や今後の課題等を意見交換，指導案･評価法の改善につなげる．

５．高大のロシア語教育関係者による共同実践研究・ワークショップの開催

高校と大学教員が共同でカリキュラム･指導案開発のための実践研究･ワークショップを開催する．また，授業改善･指導能力向上を目的とした現職教員研修を組織する．

６．高大接続，入試制度改革に関する国内外の議論・先行研究を精査・分析

他教科ですでに実施されている高大連携活動の実態情報を収集･整理し，高大接続，入試制度改革に関する国内外の議論･先行研究を精査･分析し，研究組織内で情報の共有を図り，高大接続を展望した共同プログラム開発の検討を行う．

7．多言語教育展開への基盤整備

4つの研究校は，すべてロシア語以外の外国語を開講している．今回の研究成果については，まず学校内で他の言語教育に貢献できるような働きかけをし，さらに来年3月開催予定の日本外国語教育推進機構（JACTFL）のシンポジウム･分科会において，本研究成果の中で特に多言語で活用される部分を発表する．JACTFLのシンポジウムには多言語教育に関わる教員を中心に150名近い参加者がいることから，本研究がロシア語のみならず多言語教育の内容の充実に資するものと考える．

8．研究成果の共有

研究担当者以外のロシア語教育関係者に向けて成果を共有する．高大のロシア語教育関係者が参加する研究集会や地域別の報告の場および，サイト上での共有をめざす．

上記活動を進めるにあたり，会合や勉強会，セミナーへの参加など直接のやりとりができる場を設けるほか，日常的には，インターネット上で利用できるグループウエアを通してやりとりを行う．

【進捗状況】

1．各拠点校で地域連携・課題達成型授業活動展開に向けたロシア語学習指導案・評価法のアウトラインを確立

5月，7月，9月に打ち合わせ会を実施，さらにネット配信等を通じて以下の諸点について，検討･協議を重ね，9–12月期にそれぞれ試験的実施を開始した．

1) 高等学校における外国語教育の方向性の共有

研究課題に取り組む大前提となる，平成29年度に改訂される高等学校の学習指導要領について以下の点を中心にメンバー相互の理解を深めた．

(1) 新学習指導要領の特徴である3つの柱（①知識や技能，②思考力，判断力，表現力，③学びに向かう力，人間性を育てるべき資質･能力）

(2) 外国語学習の目標としての5つの領域（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」別の目標設定）

2) ロシア語学習指導案・評価法開発に向けての現状分析と課題の明確化

各拠点校が所在する地域とロシアとの関連，地域に必要なロシア語人材，各拠点校のロシア語教育実施状況（習得目標レベル，学習時間数，教材，教員の状況等）を整理･分析し，各拠点校での地域連携･課題達成型授業活動展開に向けたロシア語学習指導案･評価法のアウトラインを決定した．当初，地域のニーズに即したロシア語を使った社会参加活動を各学期の学習目標として立てることを計画していたが，事業開始時期が予定より遅れたこともあり，2･3学期の目標立案に集中した．

3) ロシア語学習指導案・評価法の開発－試験的実施

２で明確になった課題を踏まえ，それぞれの拠点校の研究担当教員が，研究主任および運営指導委員のサポートを得て以下のロシア語学習指導案･評価法の原案を作成，試験的実施を開始した．

〇北海道札幌丘珠高等学校

札幌の姉妹都市であるノボシビルスクからの教員訪問団来日に合わせ，学校に招いてロシア語の授業見学や交流会を計画，コンピューターや辞書による調べ学習→学校紹介･交流で使う表

現の習熟→ロシア語による歌唱指導→日露風物カルタづくり等イベントに向けた準備活動，当日の課題達成，事後にロシア側生徒とSNSやカード交換で取り組みをさらに発展している．
使用教材：『ロシア語教材 テレモーク 教科書初級編』北海道ロシア語教育推進連絡協議会調査研究部会著，北海道教育委員会生涯学習部生涯学習推進局生涯学習課, 2007.

〇青森県立青森南高等学校

来校するロシア人生徒へのわが町紹介という取り組みに向け，指導案，評価法を作成．取り組みを展望した授業活動を通じて，5技能の総合的な育成と評価を実現．また実際の交流後にICTの活用により，双方向的な意見交換を行う授業を実施中．
使用教材：『初級ロシア語20課』黒田龍之介著，白水社, 2012.

〇関東国際高等学校

2020年の東京オリ・パラ開催時ロシア語ボランティア活動実施に向け，渋谷区内教育機関（小・中・高・大）の縦の連携構築の第1歩として，ロシア人を交えた機関合同交流会を企画・運営．実施に向け文化比較を踏まえた自律的調査活動，表現練習などのグループワーク活動を展開．11月にキックオフミーティングを実施，中高大生及びロシア人留学生が参加．将来的には競技場周辺のガイド，ロシア語マップ作成，ロシア語圏チームの応援などを計画している．
使用教材：「ПОЕХАЛИ!」，「ПАСПОРТ」，「今すぐ話せるロシア語単語集」
「ロシア語能力検定試験合格への手引き3級・4級対策問題集」南雲堂フェニックス
ロシア語検定試験過去問題集，ТРКИ対策本：「ТЕСТЫ, ТЕСТЫ, ТЕСТЫ...」
「МЫ ЧИТАЕМ И ГОВОРИМ ПО-РУССКИ」白水社
「ロシア語の教科書」ナウカ出版
その他教員作成オリジナルテキスト

〇富山県立伏木高等学校

スポーツ選手団，日本語学習青年団，ウラジオストク市友好高校からの生徒代表団など複数回のロシアからの訪問団に対し，富山県の見所・魅力紹介，文化体験イベント実施等の取り組みを計画．実施準備のための授業活動指導案と評価ルーブリックを作成．発表に向けた原稿作成・プレゼン練習等，5技能を使った授業活動を展開．実際の交流会での取組実施．また，高大連携活動の一環として留学経験のある富山大学学生との交流会を実施，卒業後のロシア語学習の展望を生徒に示し，学習意欲のさらなる向上につなげる取り組みを行った．
使用教材：『ロシア語発音入門』ボンダレンコ・オクサーナ著，安藤智子編集，富山県立伏木高等学校, 2008.
『会話で学ぶロシア語－初級』北岡千夏, A.ディボフスキー著，南雲堂フェニックス, 2005.
『外国語学習のめやす－ロシア語版』国際文化フォーラム, 2015.
開発教材：『ロシア語』ボンダレンコ・オクサーナ著，富山県立伏木高等学校, 2017.

２．高大のロシア語教育関係者による共同実践研究・ワークショップの開催

9月期，授業改善・指導能力向上を目的とした現職教員研修を国際文化フォーラム主催で組織，当事業の研究主任が主任講師として企画・運営に参加．研修には当事業研究担当者が全員参加，新学習指導要領の捉え方，ロシア語教育の現状と今日的課題，文化教育，音声指導，授業活動の実際，教材作成等の内容の研修が行われた．

12月期，高校と大学教員が共同でカリキュラム・指導案開発のための実践研究・ワークショップ「ロシア語教育研究集会」を開催，「ピア・ラーニングにおける相互作用と言語学習活動のデ

ザインについて」と題して講師を招いてワークショップを実施，また「高等学校ロシア語研究校･研究授業発表会」を研究集会第2部として開催し，各拠点校のそれまでの授業実践の報告が行われ，フロアとの活発な意見交換がなされた.

3．各拠点校における新しい指導案に基づくロシア語授業活動の相互見学

拠点校における新しい指導案に基づくロシア語授業活動の見学を1月末に札幌丘珠高校，青森南高校で実施．見学後に研究担当者間で指導案の内容，評価の実施状況･評価内容について，問題点や今後の課題等を意見交換，指導案･評価法の改善を検討した.

4．多言語教育展開への基盤整備

3月に開催された日本外国語教育推進機構（JACTFL）のシンポジウム･分科会において，本研究成果の中で特に多言語で活用される部分を発表．多言語教育全体の今後の展望という文脈で本研究の内容についてフロアーと意見交換.

5．研究成果の共有

研究担当者以外のロシア語教育関係者に向けて成果を共有する目的で，実施計画内容，活動記録等を掲載した最終報告書を上梓し，高大のロシア語教育関係者に配布した.

【課題】

1．地域貢献活動という学習目標の設定において，行政サイドとの連携が必要であるが，時間数が少なく，また担当教員だけの力ではそこまで到達するのが難しい現状にある．関東地域では既に行政との連携を視野に入れた活動が始まっているが，その他の地域では今年度についてはロシア人ゲストとの「交流」などが主だった活動目標となっており，「ロシア語を使った社会生活における課題解決能力の習得」という実質的な内容に踏み込むことができるような目標設定が可能な条件を作る必要がある.

2．具体的･実践的目標に向けての授業活動を展開する場合，そこで習得した言語技能を応用し，自動化能力へとつなげていくという姿勢が生徒間にまだ弱い．また，個々のプロジェクトベースの学習での成果が，授業時間数の不足や自宅学習の時間が取れない等の理由で，その場限りの成果で終わり，次の学習目標に有機的につなげていくという意識が低い.

3．取り組み初年度で，これまでとは全く違うプロジェクトベースの授業計画，指導案作りがなされたが，5領域の言語活動がどのような配分でなされるべきか，どのような言語材料を使用するか等の細部までは，なかなか配慮が行き届いていない状況である．また，学習者自身の自己評価と教師からのフィードバックなどの積み重ねによる継続的評価システムを作り上げるまでには至っていない.

4．高大接続，入試制度改革に関する国内外の議論･先行研究を精査･分析する計画であったが，事業実施の開始が遅れたことにより，現在，各拠点校とのかかわりの深い大学機関における実態調査のみを進行させており，まだ結果が出せていない.

(5) 評価計画・進捗状況・課題

【評価計画】

1．学習者の授業活動における発表等を学習者言語データとして抽出し，CAF分析を用いて，学習者の言語習得過程の多角的評価を実施する．特に外国語活動型授業のプロセスで定期的な評価を行う.

2．研究授業活動に従事した教員を対象に，開発された指導案，評価法について，実践の過程でどのような問題が起こり，どのような課題が見えてきたか，また成果点等について参与観察とインタビューによる質的調査を各学期で中間，期末の2回実施する．

3．授業活動に連携･協力した行政等の地域組織担当者に対し，学習者のロシア語を使った体験活動の過程でどのような問題が起こり，どのような課題が見えてきたか，また成果点等についてインタビューによる質的調査を行う．学期末の社会参加体験学習後に実施する．

4．研究開始前と研究活動終了後の2回，ТРКИ (Test of Russian as a Foreign Language) A1-A2レベルに準拠したテストを実施し，各拠点校学習者の5領域（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り)」「話すこと（発表)」「書くこと」）におけるロシア語能力を客観的に測定する．

【進捗状況】

1．学習者に対する評価

本プロジェクトでは,「学習者の学びを内容と言語の両面から評価し，また形成的評価と総括的評価を有機的に統合した評価法の開発を進める」ことを目標としている．そこで，平成29年度は，まず学習者が当該目標にどの程度達したのか最終的に評価する「総括的評価」の開発と実施に取り組んだ．具体的には，全拠点校で実施された「(生徒による）ロシア人に対するロシア語でのプレゼンテーション」を評価対象とし，どのような評価領域を共通で含めるべきか，まず研究担当教員全員で検討し決定した．続いて各校の事情に合わせて研究担当教員がより具体的な評価項目を含めたルーブリックを作成した．教員たちがルーブリックに含めた評価項目としては，発音や声の大きさ，アイコンタクト（＝学習者のパフォーマンス，主に言語面)，わかりやすさや構成（＝発表内容，主に内容面）などが見られた．全拠点校でルーブリック評価を実施した結果，総じてロシア人に伝わるロシア語でプレゼンテーションすることができており，生徒の学びが言語面，内容面両面において観察された．さらに，富山県立伏木高等学校など生徒たちとルーブリックを共有し，教師のみならず生徒たち自身によるピアレビューを行うことによってより主体的な学習を実現できた学校もあった．

5つの言語領域に関するより具体的な評価方法については,今年度は各研究担当教員が形成的評価として個別に実施した単語テストや課題作文などを含める程度にとどめた．今後は，よりきめ細やかで体系的な評価方法の導入を検討していく．

2．教員に対する実施過程評価

2017年5月，7月，9月，12月に打ち合わせ会を実施し，研究授業活動に従事した教員を対象に，プロジェクトベース授業の実践過程での具体的な問題や課題について，活発に意見交換がなされた．特に，プロジェクトベース授業の実施過程で直面する困難要因（e.g., 慢性的な授業時間や生徒の勉強時間の不足，それに起因する生徒のロシア語能力の伸び悩み，教師の負担の限界など）について，如何に学習者の学びと習得を意識しながら理想と現実のすり合わせがしていけるか，活発に議論された．また，2018年1月には札幌丘珠高校，青森南高校において参与観察とインタビューによる質的調査を実施する予定にしている（当初2度実施する予定であったが，予算の都合により今年度は1度だけ実施することとなった)．

3．連携・協力の可能性のある行政等の関係者へのヒアリング

2017年1月末に札幌丘珠高校を訪問した際，行政等の関係者から連携･協力の可能性についてヒアリングを行った．

４．客観的ロシア語能力の測定（今後の予定）

既存のロシア語能力試験に準拠したテストをそのまま実施しても語学能力の到達度を正確に測るのは難しいという問題が指摘されたため，今期はA1レベル以下のベンチマークの設定，そして教師一人でも比較的容易に実施と採点ができるような簡易テストの開発の可能性について検討する．

【課題】

１．学習者の言語面での伸び（＝言語習得）を評価する方法の一つとして，当初は学習者言語のCAF分析を行う予定にしていたが，CAF分析には学習者言語データの収集，文字起こし，分析が伴うため，綿密で正確に学習者言語が評価できる一方で，教師にかかる負担は大変大きい．特に今年度は指導と評価方法の原案を作成することにもなっていたため，各研究担当教員の負担を考慮して，今年度の導入を見送った．

２．今年度は少なくとも4回にわたって研究担当教員と会合を持ち，個別の問題について振り返り， 改善に向けた検討と議論を重ねていくことができたが，その実施過程について体系的に評価できた訳ではなかった．今後は，プロジェクトベース授業を実施するにあたって，ある程度客観性の担保された評価基準を設定する必要があるだろう．

３．プロジェクトベース学習全般に言えることだが，教員への負担が多大である．特に地域連携を視野に入れる場合，地域連携先の関係者との協力関係構築のために学校外での仕事が増加する可能性が高い．教員が一人で全てを抱え込むことのないよう，ロシア語教師コミュニティを形成し，情報やアイディア，教材等自由に共有できるスペースと時間をできるだけ確保することが必要である．

４．高校のロシア語教育が置かれている状況から，各拠点校で担当教員が一人で既存のロシア語能力試験をそのまま実施するには様々な困難が伴うことが具体的に明らかになった．まず，当初実施する予定にしていたTRKIは，既存の試験の中では総合的にロシア語能力が測れる試験ではあるが，教師一人で実施し採点するには負担が大きすぎるため，定期的な実施は現実的ではないという点である．また，今年度は事業実施の開始が遅れたことにより，各拠点校でのプロジェクトベース授業の実施期間も短かく，ロシア語習得を客観的に測定する意味は殆どなかったという事情も重なった．そもそも高校のロシア語教育が置かれている学習条件下でロシア語能力がA1レベルに達する生徒は日本全体でも一部であり，既存のロシア語能力試験に準拠したテストをそのまま実施しても語学能力の到達度を正確に測るのは難しいという問題も指摘された．今後は，A1レベル以下のベンチマークの設定，そして教師一人でも比較的容易に実施と採点ができるような簡易テストの開発が必要となる．

III-2. 実施体制

(1) 実施体制の概要　※図1参照

大阪大学大学院教授林田理惠が研究主任となり，北海道，青森，富山各地域の教育委員会の協力を得て，指定された拠点校のロシア語担当教員，私立校の担当教員とともに研究を進める．拠点校が複数地域にわたるため，運営指導委員も複数の地域の大学等のロシア語担当教員に依頼する．

なお，研究を進めるにあたっては，前述の『外国語学習のめやすーロシア語教育用』や，互いのことばを教える日露の高校教師の合同研修など，高校ロシア語教育促進事業に取り組んでいる公益財団法人国際文化フォーラムの全面的な協力を得る．

(2) 研究担当者（○印－研究主任）

職　　名	氏　　名	担当学年及び教科
○大阪大学大学院教授	林田　理惠	
大阪大学大学院准教授	横井　幸子	
北海道札幌丘珠高等学校教諭	遠藤　雅公	1–3 年，ロシア語／英語
青森県立青森南高等学校講師	工藤　綾華	1–3 年，ロシア語／英語
富山県立伏木高等学校講師	ボンダレンコ･オクサーナ	2–3 年，ロシア語
関東国際高等学校教諭	永沼　栄理子	1–3 年，ロシア語

(3) 運営指導委員会

①組　織

氏　　名	所　　属	職　　名	備考（専門分野等）
高橋　健一郎	札幌大学	教授	日露対照言語学
熊野谷　葉子	慶應義塾大学	准教授	ロシア民俗学･ロシア語教育論 日本ロシア語教育研究会代表
カザケーヴィチ･マルガリータ	富山大学	教授	ロシア語教育論
水口　景子	公益財団法人国際文化フォーラム	事務局長	外国語教育論，国際交流

②活動計画・進捗状況・課題

【活動計画】

1．学習指導案･評価法立案に対して研究担当者の会合への参加や，グループウェアを通じて助言を行う．

2．行政や地域組織，ロシア関係団体とのネットワーク作りをサポートする．

3．高大接続，入試制度改革に関して，情報提供と助言を与える．

4．高大のロシア語教育関係者による共同実践研究･ワークショップに参加し，助言，情報提供を行う．

5．各地域の研究成果発表の場に出席，総括的評価を行う．

【進捗状況・課題】

1．5月，7月，9月に実施した打ち合わせ会及びネット配信等を通じて各拠点校での学習指導案･評価法立案に対して研究担当者に助言･サポートを行った．

2．9月期，授業改善･指導能力向上を目的とした現職教員研修の企画･組織･運営に中心的役割を果たした．

3．富山大学と伏木高校間での交流事業実施について組織化，生徒にロシア語学習の長期的展望を与える機会を作った．また，札幌大学･札幌丘珠高校間での高大連携事業について，情報提供と今後の可能性についての検討を行った．

4．12月期，高校と大学教員が共同で開催したカリキュラム･指導案開発のための実践研究･ワークショップ「ロシア語教育研究集会」に参加し，助言，情報提供を行った．

5．1月末に札幌丘珠高校，青森南高校で実施された拠点校における新しい指導案に基づくロシア語授業活動見学に出席し，指導案の内容，評価の実施状況･評価内容に関する問題点や今後の課題等，総括的評価を行った．

6．関東地域で渋谷区とのパイプ作りにより，2020 東京オリンピック･パラリンピック開催時の地域青少年による主体的ボランティア企画･運営に向け基本方針を作成．その他の地域組織，ロシア関係団体とのネットワーク作りに関しては，事業開始時期が遅れたため，まだ具体的には取り組めていない．

活 動 記 録 (2017.4.1－2018.3.31)

4–6月　研究開始準備

7月	**強化地域拠点の取組**	**運営指導委員会**
1.	第1回会合（於東京） 外国語教育の方向性を共有，地域のロシア語に対するニーズ分析を行い，拠点校の特性を踏まえた研究課題を明確化	第1回会合に出席 左欄の内容をサポート
2.	第1回会合で決定した課題に基づき，学習指導案･評価法の原案を作成（各拠点校研究担当者）	グループウェアを通じて助言

9月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
1.	授業改善･指導能力向上を目的とした現職教員研修の開催（大学研究担当者が実施を組織－於東京八王子）	
2.	第2回会合（於東京） 研究担当者が学習指導案･評価法について中間報告し，研究担当者間で意見交換 各地域の高大連携事業の可能性に関し，研究組織内で情報共有	第2回会合に出席 研究担当者の中間報告，高大接続，入試制度改革分析に対して助言
3.	第2回会合で得た助言に基づき学習指導案･評価法を改訂（各拠点校研究担当者）	グループウェアを通じて助言

10月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
1.	各拠点校における新しい指導案に基づくロシア語授業活動に関して意見交換（グループウェアを通じて）	グループウェアを通じて助言

11月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
1.	各拠点校における新しい指導案に基づくロシア語授業活動に関して意見交換（グループウェアを通じて）	グループウェアを通じて助言

12月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
1.	高大のロシア語教育関係者による共同実践研究の場「ロシア語教育研究集会2017」にて「高等学校ロシア語研究校･研究授業発表会」開催（大学研究担当者が実施を組織，於大阪大学）	ワークショップに参加，助言･情報提供を行った.
2.	上記発表会にて学習指導案･評価法，授業実践経過について各校担当者が発表，助言を得て各最終案に反映（各拠点校研究担当者）	

1月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
1.	各拠点校における授業活動に関する意見交換等の内容を踏まえて学習指導案･評価法の最終案を取りまとめ（各拠点校研究担当者）	グループウェアを通じて助言
2.	拠点校における新しい指導案に基づくロシア語授業活動の見学を1月末に札幌丘珠高校，青森南高校で実施．見学後に研究担当者間で指導案の内容，評価の実施状況･評価内容について，問題点や今後の課題等を意見交換，指導案･評価法の改善を検討した.	指導案の内容，評価の実施状況･評価内容に関する問題点や今後の課題等，総括的評価を行った.

2月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
1. 研究担当者以外のロシア語教育関係者に向けて成果を共有する目的で，実施計画内容，活動記録等を掲載した最終報告書を上梓し，高大のロシア語教育関係者に配布		評価，今後の展望等に関して報告を提出

3月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
1. 日本外国語教育推進機構（JACTFL）のシンポジウム･分科会において本研究成果を発表，多言語教育展開への展望について，参加者と議論を行った．（大阪大学研究担当） 2. ロシア語教育支援に関するウェブサイト（大阪大学：林田理惠･横井幸子が代表を務める科学研究費助成事業の研究成果として構築）http://kyoiku-ru.org/ に研究成果を掲載		

本報告書は次のURLからダウンロードできます：http://kyoiku-ru.org/

＜参考文献＞

Бахтин, М. (1975). Слово в романе // *Вопросы литературы и эстетики.* М., 72−233.

林田理惠(2002)「第二言語教授－学習理論のもう一つの流れ――ロシア･ヴィゴツキー学派の現在――」『多文化共存時代の言語教育』平成13年度教育研究学内特別経費プロジェクト「異文化共存時代の外国語教育･学習(3)」研究成果報告書，大阪外国語大学, 41−62.

林田理惠（2014）「ロシア語教育実情調査――将来的展望と中等･高等教育機関連携の可能性――」『複言語･多言語教育研究』2号, 60−71.

Леонтьев, А. А. (1974). *Основы теории речевой деятельности.* М.（米重文樹他訳『現代ソビエト心理言語学』第2章，明治図書）

Леонтьев, А. Н. (1981). *Проблемы развития психики.* 4-е изд. М.

Выготский, Л. С. (1996). *Мышление и речь.* М.（柴田義松訳『思考と言語』新読書社）

横井幸子，林田理惠（2013）「内容を重視した外国語教育のカリキュラム開発と指導について――第2外国語としてのロシア語の場合――」『ロシア語教育研究』第4号, 57−73.

第１部

各校　取組みの記録

北海道札幌丘珠高等学校（研究拠点校）

北海道旭川南高等学校

北海道札幌国際情報高等学校

青森県立青森南高等学校（研究拠点校）

関東国際高等学校（研究拠点校）

富山県立伏木高等学校（研究拠点校）

札幌丘珠高校でのロシア語教育の歩み

遠藤　雅公

Ⅰ．札幌丘珠高校の概要とロシア語導入の経緯について

I-1. 学校概要



本校は道立の全日制普通科の高校として，生徒急増期の1975年（昭和50年）に開校しました．今年は41回目の卒業生が巣立ち，卒業生総数は1万5千人を超えています．1学年8クラス，全校生徒960名の大規模校です．

卒業後の進路は，大まかに大学・短大進学45%（うち国立大学進学者は一ケタ），専門学校45%，就職10%です．



I-2. ロシア語の導入

当初は新設校として進学指導に力を入れていましたが，近隣に高校がいくつも新設されたことや，交通に不便であることから，レベルは徐々に下がっていきました．局面を打開して特色を出すため，2004年（平成16年）に本校は札幌大学と高大連携協定を結びました．そしてその一環として外国語教育に力を入れる目的から，中国語，韓国語とともにロシア語が第２外国語として導入されました．

私は翌年本校に赴任し，ロシア語を担当しました．当時文部科学省から北海道教育委員会が指定を受けて「高等学校における外国語教育多様化推進地域事業」が始まりました．事業内容は，日本初の高校生向けロシア語教科書づくりと，日露の高校生の相互派遣交流でした．私は教科書づくりへの参画と，モスクワからの高校生短期受け入れと本校生の派遣に携わりました．そういう動きと相まって，ロシア語の導入は時宜を得た特色として一役買っていたと言えるかもしれません．

Ⅱ．本校での授業形態とこれまでのロシア語教育の歩み

II-1. 肩の力を抜くこと

本校では，3年次に選択科目の1つとして教育課程に組み込まれています．当初はカリキュラムの都合で，文系の国際コースというクラスの生徒しか選択できないようになっていました．初めてロシア語を受け持った時は，生徒はわずか4名でした．この科目が導入された初年度は1名しかいなかったそうです．少人数ですが，彼らはみんな語学の勉強が好きで，異文化に興味をもっていました．とはいえ，週2時間しか授業がなく，受験には関係がない科目です．3年生は受験を控

えていて，9月以降は受験勉強の準備でそれどころではありません．そんななかで，極めて難解な言語を新たに腰を据えて学ぶ雰囲気は生まれません．キリール文字をマスターし，変化表を始めとする重要な文法を理解して使えなければなりません．ただでさえハードルが高いのに，生徒のやる気と興味を持続させるにはどうしたらいいのか悩みました．そこで，まずは進度のことよりも肩の力を抜いて楽しめる授業内容を重視しようと考えました．



II-2. 授業の流れ

ロシア語の授業をひとりで担当しているため，他の科目と違って別の教員と進度や評価を合わせる必要がなく，裁量の幅が広がることは自分にとって魅力でした．初年度は大学の教養課程で使われている教科書から選びましたが，2年目からは道教委発行の「テレモーク」を使用しています．第1課から第30課までありますが，各課で扱われる新出単語は原則として10語で，扱われる文法事項は最初の10課までは複雑なものはなく，会話中心で取り組みやすく構成されています．教科書に沿った授業の流れとしては，前回の復習を終えた後，①新出単語音読，②重要表現やトピックの確認と文法事項説明，③CDを聞きながら本文の音読練習，④キリール文字を見ながら音読練習，⑤問題演習，といった具合です．文法事項が複雑でなければ，1課分は30分ほどで済むこともあります．

II-3. 異文化の面白さを伝えること

50分の授業のなかで，教科書の中身だけではあっさりしていて，定着させるために内容を補うことが必要なこともあります．そこで教師の力量が示されます．プリントを用意したり，内容に関連した話を入れたり，あるいは内容に関連しなくても，季節やその時々のロシアに関する話題は取り入れるように心がけています．

まず，年度初めの1回目の授業で，私がロシア語を志すきっかけになった父のシベリヤに抑留された体験談を話します．生きる術として片言のロシア語を駆使していたという話に，語学の大切さが伝わるからです．そして，学生時代に没頭した学園祭でのロシア語劇の一場面を披露します．演目は，チェーホフの代表作「ワーニャ伯父さん」の第3幕のワーニャの台詞です．1回の公演のために何度も練習を重ねたことが，音読の訓練になったことを伝えたいからです．

アルファベットを学習させる際は，みんなでロシア語による「きらきら星」の替え歌「アルファベットの歌」を歌います．取り上げてから最低1ヶ月は毎回授業の初めに歌うため，全員がアルファベットを言えるようになります．その後は，月に数回は歌を紹介するように心がけています．自分自身が学生時代にロシア語を学び始めたときに，ロシア民謡を発音練習代わりに覚えていって，ロシア語の音声に慣れるのにずいぶんためになったからです．これまで取り扱ってきた歌は次の通りです．

（ロシア民謡）

カリンカ　／　カチューシャ　／　モスクワ郊外の夕べ　／　ヴォルガの舟歌　／　赤いサラファン　／　ともしび　／　ポーリュシュカポーレ　／　百万本のバラ　／　空色の列車（アニメ「チェブラーシカ」より）　／　誕生日の歌（同じくアニメ「チェブラーシカ」より）　／　トロイカ　／　一週間

（ロシア語に訳されている日本の歌）

ふるさと　／　幸せなら手をたたこう　／　*宗谷岬（ダ･カーポ）／*酒よ（吉幾三）

*「宗谷岬」と「酒よ」は，サハリンからの永住帰国者の方が，意味を汲んで歌詞をつけたものを使用しています.

ロシア語の歌は古いものばかりですが，あえて新しい歌は取り上げていません．教員が率先して歌い，生徒に声を出させることが目的であるため，自分が歌えるものに限定しています．ただ，これからは人気のある新しい歌も紹介できればと思います.

五十音をロシア語表記で表す練習では，自前のプリントを用意します．そこで取り上げるロシアの風物や都市名，人名を授業で文化的な話題につながるものにしています.

例えば，プリントからの抜粋です.

問題1　次の語を発音して，訳して下さい.

папа	мама	такси	меню	туалет
телефон	кофе	суп	киоск	этикет
музыка	поэма	норма	метро	соус

問題2　次のロシアの地名を読んで下さい.

Сахалин	Сибирь	Санкт-Петербург
Владивосток	Кремль	Байкал　Ялта
Чернобыль	Украина	Амур　Волга

問題3　次のロシアの風物を読んで下さい.

икра	самовар	тайга	печка
матрёшка	сарафан	тундра	чебрашка
водка	пирошки	чай	борщ

問題4　次のロシアの人名を読んで下さい.

Ленин	Путин	Горбачёв	Чайковский
Пушкин	Достоевский	Толстой	Чехов
Пётр	Екатерина	Катюша	Иван

問題1は音読すれば意味が推測できる単語を選びました．問題2は有名であったり，地理的，歴史的に意味のある場所を取り上げました．サハリンは北海道とゆかりの深い場所であり，美しい古都サンクトペテルブルグはその魅力を，ウラジオストックは独特な名前の由来を紹介するというふうに話を広げています．問題3では，地理や自然環境，食文化について触れ，問題4では歴史や音楽，文学などについて紹介できます.

その他にも，所有代名詞や動詞の変化などを取り扱う際にもプリントを用意して，演習をさせています.



英語以外の語学を学んでいる特性を生かして，それを何らかの形で使える場を設定しようと，中国語，韓国語，ロシア語それぞれの選択者が，学んでいる言語を使って「第２外国語合同発表会」を催したこともありました．ロシアの歌を歌ったり，民話「大きなかぶ」(Репка)や「まるパン」(Колобок)を演じるなど，好評を博しました.

1月はすでに定期考査が終了していることから，教科書を進める代わりにロシア文化についてのプレゼンテーションをさせています．ロシアの食文化や政治，経済，スポーツ，社会生活や慣習など，彼らが興味のある分野を自由に選ばせ，授業で数回の準備を経て，数分間の発表にまとめます.

例えば，一昨年の例では「司馬遼太郎とロシア」「ロシアのジェスチャー」「 ロシア・ウォッカ事情」「ロシア料理」「原始人類とユーラシア大陸」「ロシア演劇の魅力」「ロシア映画の今」「チャイコフスキー」「ロシアの教育」「ロシアのフィギュアスケート」がテーマに挙がりました．発表の基になる材料は，『ユーラシア・ブックレット』（ユーラシア研究所･東洋書店）です．本校の図書室には，この冊子の第1号から200号までのほとんどが揃っているため，まずはその中から好きなテーマを見つけさせて，あとは必要に応じてインターネットも活用して発表させ，自分たちで互いに評価もさせています.

II-4．外部講師の協力

ロシア料理実習を年1回実施しています. 外部からボランティアでロシアに滞在されていた方に講師をお願いしています．これまで作った料理はボルシチ，ペリメニ，ブリヌイです．最近は生徒の好みに合わせて，ペリメニを作ることが多くなっています．生徒たちがとても楽しみにしている行事です.





また，札幌市の外郭団体である「札幌国際プラザ」の国際交流員から講話をしてもらう機会もつくっています．国際交流員は，札幌と姉妹都市提携を結んでいる国々からの出身者で日本語が堪能な方々が交流員として常駐し，札幌の文化活動や国際交流事業に携わっています．こちらの要望に合わせて興味深い話を伺えます.

Ⅲ．外国語教育強化地域拠点事業にかかる本校での取り組みと国際交流について

Ⅲ-1．ノボシビルスク若手教師招聘事業

外務省の外郭団体である日露青年交流センターが企画し，北海道ノボシビルスク協会が窓口になって，平成29年10月にノボシビルスクの公立学校に勤務する40歳以下の若手教員15名が札幌に招聘されました．その際，訪問団が本校を訪れることとなりました．

日本に来るのが初めての方が多いため，私たちは学校を紹介したり，授業や部活動を見学してもらう計画を立てました．ロシア語の授業では，かるたをアレンジして「日露風物かるた」と題して，日本とロシアの風物に関する手作りカードをつくりました．読み札の代わりにロシア語と日本語で書いたヒントをそれぞれ用意して遊びました．「ふるさと」と「幸せなら手をたたこう」の歌を日本語とロシア語で披露しました．ちょうど訪問日が10月31日でハロウィンだったこともあり，生徒たちは手作りケーキもつくりました．

およそ1ヶ月前からロシアの方々を受け入れる準備をしました．慌ただしくもっと時間がほしかったという声がありましたが，22名の生徒たちは全員，交流はとても楽しかったと述べています．明確な目的のために，生徒たちはインターネットや辞書を駆使してカルタ作りをし，学校説明のためにロシア語のシナリオを練習し，交流に必要な会話表現を覚えました．






訪問団のある先生がノボシビルスクの生徒たちが書いたカードを持参してくれました．
本校のロシア語クラスの生徒たちはそれを読んで感動し，自分たちもカードを書いて送りました．そこからメールやインスタグラムのやりとりも始まっています．

Ⅲ-2．国際交流の活用

先述のように，ロシアからお客様が見えることもありますが，幸い本校でこれまで下記の通りロシアに関わる国際交流事業に関わる機会をもつことができました．

高等学校における外国語教育多様化推進地域事業（モスクワ高校生受け入れ･本校生派遣）
（2005年〔平成17年〕～2007年〔平成19年〕）
青少年サハリン･北海道「体験･友情」の船（小･中･高･大学生相互派遣･引率）
（2006年〔平成18年〕～2013年〔平成25年〕）
青少年サハリン･北海道「体験･友情」の翼（小･中･高･大学生相互派遣･引率）
（2014年〔平成26年～〕）
国際文化フォーラム高校生派遣事業（モスクワおよび東京　高校生派遣･引率）
（2016年〔平成28年〕～2017年〔平成29年〕）
日露青年交流事業（サンクトペテルブルグ高校生派遣）
（2018年〔平成30年〕）

そして，そのことでロシア語を学ぶ生徒たちに少なからず波及効果が表れていると感じています．参加した生徒が周りの生徒たちにそれを伝え，興味を持つ者の数が増えていくのです．





Ⅳ．今後の課題と展望について

Ⅳ-1．クラスの生徒数

最初1人から始まったロシア語のクラスは，2年目4名，3年目15名，4年目36名と増えていきましたが，その後は年によって人数はまちまちです．教育課程が変わり，選択できる生徒数の枠を文系クラスに広げて最大20名という人数制限を設けてからは，だいたい20名前後で推移しています．数年に1名から2名の割合で，地元の大学のロシア語学科へ進む者も出ています．今後もこの状況は大きく変わらないと思われます．一方通行にならない授業を行うには，クラスのサイズは10名～15名程度が良いと思っています．

Ⅳ-2．教員側の研修意欲と経験

教師自身の研鑽と自助努力の必要性をずっと感じてきました．とりわけ，ロシア語のような特殊な科目は，教師側の進め方次第で生徒の授業への取り組み方が大きく変わると思っています．しかし，教師側の努力だけでは限界があることも事実です．学校で多忙な労働環境が広がるなかで，教師が教材研究や研修に費やせる時間や意欲をどう捻出できるかが大きな問題だからです．

そういう意味では，私がこれまで得てきた経験は，意欲や発想を生み出す上で大きな意味がありました．

稚内の高校に転勤した翌年の平成6年から7年間にわたって，市民向けにロシア語の講座を行ないました．当時は，ロシア漁船が年間300隻以上訪れました．街には大勢のロシア人がやってくるため，商店街や道路標識にはキリール文字の表示がつけられ，ロシア語は英語よりもはるかに重要な外国語でした．講座に訪れる方々は漁師，スーパーの店員，教員，主婦など様々で，仕事で実践的に使える力を身につけたい人もいれば，教養として外国語を学びたい人，ロシアに興味がある人など様々でした．講座では，地元の大学で短期留学していたサハリンの大学生に講座のお手伝いをしてもらったり，街で知り合ったロシア人漁師に来てもらったこともありました．また，サハリンから稚内に永住帰国された日本人の方々にも助けていただいて，他にはない講座内容になりました．7年間通い続けてくださった方々もいらっしゃいました．目標や目的の違う人たちの要求に応えるにはどうしたらよいのか，そして，系統立てた語学学習をどう構築すればよいのか手探り状態だった7年間でした．

平成13年から平成17年の５年計画で実施された「ロシア語教員養成事業」に平成16年に参加し，ウラジオストックの極東国立総合大学と，函館にあるその分校であるロシア極東連邦総合大学函館校でそれぞれ半年ずつロシア語の語学研修を受ける機会を得ました．このときは，学生の立場で語学学習の面白さと大変さを実感しました．

稚内で一般の方向けの市民講座で実践的な授業方法を模索できたこととロシアの大学で学べたことは，ロシア語の授業の目標や視点，方法論を考える上で大いに役立っています．これらの経験がなければ，現在ロシア語の授業はできなかったと思います．



（極東国立総合大学のキャンパスにて）

IV-3. ロシア語の教員免許をもった正規の教員の重要性

ロシア語の授業を開設している学校の多くが，地域にいる外部識者に講師として授業を委ねているのが実情です．私はたまたまロシア語の免許と英語の免許を持って正規の教員として勤務しています．そのため，授業のみならずロシア関係の交流事業とそれに興味を抱く生徒の橋渡しができますが，講師の身分だと引率業務や時間に制約があり，今と同じようなことは難しくなります．人材の確保や育成，そしてネットワークづくりが急がれます．

IV-4. 高校のロシア語教育の目標を見つめて

ロシア語を選択する生徒たちが抱くロシアに対するイメージは，プラスでもマイナスでもなく予備知識のほとんどない真っ白な印象です．「アニメの好きなキャラクターがロシア人だったから」「ロシアにある格闘技に興味があったから」「ロシアには美女が多いから」「数学や理科が嫌いで取りたくなかったから」「ただなんとなく」など，理由は様々です．北海道がサハリンに近いことから，「祖父母がサハリン生まれで興味があったから」という生徒もいます．ただ，ほとんどの生徒は必要に迫られたからではなく，たまたま学習する機会があるからに過ぎません．

英語を習得する目的は，必ずしも英米の文化を深く知るためとは限りません．コミュニケーシ

ョンのツールとしてや国際的な仕事に就くためであったり，情報や文献の収集のためなど様々です．けれども，ロシア語を学ぶことは，どんな理由にせよロシアに興味が多少なりともあることは確かです．だからこそ，授業には言語だけでなく文化的な側面もちりばめることが重要だと思うのです．

ロシア語学習には，もちろん単語や文法事項を理解させることは重要ですが，ロシアの国に関心を持たせることと，それを通じて自国の文化を見つめ直すきっかけをつくることが何より大切だと思います．受験に関係ない科目であることで，逆に授業を柔軟に進めることを強みとして国際交流事業の活用や他校の実践を交流し合って，英語以外の第２外国語の活性化にこれからも努めたいと願っております．

（えんどう　まさきみ　北海道札幌丘珠高等学校教諭）









北海道旭川南高等学校でのロシア語授業――現状と取り組み

鈴木　桃子

Ⅰ．旭川南高等学校でのロシア語教育

旭川南高等学校は2009年に総合学科校に転換し，特色のある学校設定科目として，看護，社会福祉，韓国語，中国語，ロシア語等を設置した．これらの外国語は旭川市の姉妹都市（水原市，哈爾濱市，ユジノ･サハリンスク市）の言語である．

ロシア語の履修方法と学習時間は以下の通りである．

科目名	履修方法	学習時間
隣国コミュニケーション ロシア語基礎	2, 3年次の「自由選択科目」から． （異学年混合授業.）	週1回2時間 年間学習時間約70時間
隣国コミュニケーション ロシア語応用	3年次の「総合選択科目」から． （前年に「基礎」を履修した生徒のみ選択可.）	週1回2時間 年間学習時間約60時間

ロシア語の履修者数は年々減少しており，29年度は「ロシア語基礎」― 2名，「ロシア語応用」― 2名と過去最も少ない状況である．減少理由の一つとして，国公立大学志望者の増加が挙げられる．2, 3年次の「自由選択科目」の履修にあたって，センター試験を受ける生徒は「数学B」が必修となっている．総合学科校に転換した当時に比べ，国公立大学志望者が年々増加し，同校の特色となっている科目が受けられないという事態が起きており，履修システムの変更が検討されている．

【29年度「自由選択科目」科目別履修者数】

2, 3年生混合													3年生のみ						
数学B	工芸表現	子ども文化	社会福祉基礎	看護入門	韓国語基礎	ロシア語基礎	中国語基礎	情報処理	英会話	外国事情	ビジネス実務	情報デザイン	数学研究Ⅱ	古典研究	小論文研究	現代社会	旭川の自然	古典B	数学研究Ⅰ
155	4	16	6	21	15	2	3	0	20	21	29	7	59	2	17	0	0	33	62

Ⅱ．授業の概要

「ロシア語基礎」,「ロシア語応用」ともに次のような構成で授業を行っている．

【学習目標】

・ロシア語で「聞く･読む･話す･書く」能力を養う．

・日常的な会話のバリエーションを増やす．

【教科書･教材】

教科書：『ロシア語教科書　TEPEMOK　テレモーク』（初級編，中級編）

北海道ロシア語教育推進連絡協議会調査研究部会著，北海道教育委員会生涯学習部生涯学習推進局生涯学習課

（1年間で30課ある教科書の20課くらいまで進み，2年目の「応用」ではその残りと中級編.）

副教材：『マトリョーシカ　札幌大学基盤教育』『ДОРОГА В РОССИЮ』『しっかり学ぶロシア語　前木祥子著』等の練習問題や文化紹介項目などを使用.

【授業内容】

教科書には付属のCDが付いており，各課で「聞く･話す･読む･書く」練習ができるようになっているため，基本的に教科書通りに進めている.

授業の初めに，単語を書いたカードをカルタに見立てたカルタ取り，数詞や曜日の暗唱，前回の授業で習ったフレーズを使った質問・会話を行っている.

【その他】

教科書以外に次のようなものを授業に取り入れている.

① ロシア語の歌（「カチューシャ」「モスクワ郊外の夕べ」「ヨーラチカ」「ワニのゲーナの歌」等）
② ロシア語で年賀･クリスマスカードの作成
③ ロシア映画の鑑賞（「Ирония судьбы, или С легким паром!」「コーカサスの虜」「ナイトウォッチ」等）
④ 調理実習（韓国語，中国語クラスと合同で各国料理を調理し，試食する.）

【成績評価】

年4回の試験結果及び授業態度，課題提出の状況等を総合的に評価.

Ⅲ. 新たな取り組み

昨年9月に公益財団法人国際文化フォーラム主催の「日露高校教師合宿」に参加し，ロシア語教育の課題や授業の作り方，文化教育，音声指導，教材作成等の研修を受ける機会を得た．他校の先生方の取り組みに刺激を受け，ロシア語授業の総括として次の取り組みを実施した.

①「ロシア人ゲストとロシア語の詩を鑑賞しよう！」

【対象クラス】ロシア語応用（学習歴2年）

【授業内容】

- ロシア語で自己紹介.
- 詩人の紹介，詩の解説，朗読.（エセーニン『Белая берёза』，プーシキン『Если жизнь тебя обманет』）
- ゲストとフリートーク「ロシアについて色々聞いてみよう！」.
- 後日，生徒からゲストに年賀･クリスマスカードを送付.

生徒からは発音が難しいが，ロシア語の詩は音が綺麗といった感想が聞かれた．ロシア語での自己紹介が通じて嬉しそうであったが，フリートークではロシア語がほとんど話せず悔しかったと話していた．今後は早い段階でこのような交流授業を取り入れ，ロシア語学習のモチベーションアップに繋げたい.





②「ロシア人ゲストにペリメニを習おう！」
【対象クラス】ロシア語基礎（学習歴1年）
【授業内容】
- 事前にプリントで学習したフレーズを用いながら，一緒にペリメニを作成.
- 後日，生徒からゲストに年賀・クリスマスカードを送付.

生徒は自分のロシア語が通じたことが嬉しそうであった．ゲストに旭川在住のサハリンからの永住帰国者の方に来てもらったが，生徒はサハリンや永住帰国についてあまり知らない様子であった．科目名にもなっている「隣国コミュニケーション」の一歩として，地域に暮らすロシアにゆかりのある方々のことや姉妹都市などについても授業で取り上げる必要があると感じた.





③「自己紹介ビデオを送ろう！」

「日露高校教師合宿」で知り合ったノボシビルスク130番学校の先生から日本語クラスの生徒達の自己紹介動画を送ってもらったことをきっかけに，こちらからもロシア語での自己紹介動画を送ることにした.

【対象クラス】ロシア語基礎･ロシア語応用
【授業内容】
- 今までに学んだ内容を含め，辞書や会話集を用いて自己紹介文を事前に作成し，暗記.
- ビデオに収め，ノボシビルスク130番学校日本語クラスで見てもらう.
- 生徒にもCDを配布.

3年生の授業が終了する直前の1月後半に実施したため，ロシア側からビデオの感想をもらった以外にその後の交流には繋げられなかったが，3年生にとっては1年間（2年間）のロシア語授業の集大成となった．同世代のロシア人の生徒が日本語を話す姿に大いに刺激を受けたようだ．その後の授業でも自己紹介で用いたフレーズはよく覚えており，ロシア語学習としても効果があることが分かった．今後は自己紹介に限らず，テーマごとの動画を作成してロシア人生徒との交流授業が出来ればと思う.

Ⅳ．今後の課題

高校の選択授業という学習時間数の限られたロシア語授業の中で何を到達目標として進めていくかというのは難しい問題であるが，この授業が「隣国コミュニケーション」という科目名に相応しい，隣国ロシアに目を向け，隣人を知るきっかけになればと思う．今後は，ロシア語学習のモチベーションアップや実際にロシア語を使う機会として，日露交流学習プロジェクトでのロシア人生徒との交流授業や地域のロシア人住民との交流，また，学習の成果を実感する場として，ロシア語弁論大会へ挑戦するなど，新たな授業づくりに取り組んでいきたい．また，履修希望者の増加に繋がるよう，こうした取り組みを学内にも発信していきたいと考えている.

（すずき　ももこ　北海道旭川南高等学校）

北海道札幌国際情報高校でのロシア人受け入れ、交流紹介
――2017年6月12日実施の交流報告――

依田　幸子

Ⅰ．北海道国際情報高等学校について

学校教育目標に「世界の人々から尊敬されるグローバルシチズンとしての日本人の育成」を掲げ，国際交流にも非常に積極的な4学科集合型の高校である．特徴ある各学科の中で国際文化科では2年次に第二外国語がロシア語･中国語･フランス語･ハングルから選択し，必修として設置されている．また，希望者は3年次も学習を継続することができる．国際文化科以外の学科の生徒も3年次で希望をすれば履修することができる．

Ⅱ．サハリンからのヨサコイチーム来日に伴い，交流準備

札幌初夏の風物詩，YOSAKOIソーラン祭り（6月7日～11日）に参加するため12歳から33歳までの男女26名が来日した．高橋はるみ北海道知事への表敬訪問の際にも，「若い人の交流が重要だ」というメッセージがあったように，お祭りへの参加だけではなく交流の機会も作ろう，という考えから本校への交流提案があった．準備として行ったことは，ロシア語選択者の2年生9名による校内表示の作成である．さらにロシア語選択者の3年生4名は，受け入れ当日，キャンパスツアーを行うために必要なフレーズや語彙を学習した．

Ⅲ．交流当日の流れ

会議室にてロシア語選択者の3年生による歓迎の挨拶の後，11時からキャンパスツアーを行った．通常の教室授業に加え，体育の柔道の授業や，コンピューターなど実習の授業も案内した．11時50分からの4時間目の時間は，5つのグループに分かれ，生徒の英語の授業5クラスに参加してもらった．それぞれの英語の授業で交流のための準備が工夫されており，プレゼンテーションや文化交流などが行われた．12時40分からの昼休みには，本校中央に位置するキャンティーンにてヨサコイを披露してもらい，その後昼食を取りながら生徒たちと交流した．午後は部活動の生徒の協力で日本文化の体験を行った．「なぎなた」「琴」「茶道」「合唱」の交流を通し，より深い交流を行うことができた．

Ⅳ．今後の展望

交流後のアンケートから，日本側，ロシア側，どちらからも非常に満足度の高い交流であったことが分かった．「英語圏以外の国の方との英語を使った交流」の重要性が校内で共通理解としてあり，ロシア語選択者だけではなく，多くの生徒にとってよい国際交流の機会を提供できたことが成功の原因ではないかと考える．今後も，グローバルシチズンの育成という目標のためにも多言語教育の推進，交流の機会の提供に努めていきたいと考える．

（よだ　さちこ　北海道札幌国際情報高等学校）

ロシア語で青森紹介～ペテルブルグの高校生へ～
――青森県立青森南高等学校・外国語科３年――

工藤　綾華

Ⅰ．青森南高校の外国語科について

本校では各学年に普通科5クラスに加え，県内唯一の外国語科設置されており，各学年１クラスずつある．全学年が1年生次には福島県にあるブリティッシュヒルズで英語漬けの研修を行い，2年次には語学研修旅行でアメリカのメーン州にある姉妹校でホームステイを体験し，現地の小学校で日本文化紹介を行っている．また，3年次にはタイの大学生との交流も行っている．外国の言語，文化に興味を持つ生徒が多く，英語，ロシア語のスピーチコンテストには活発に参加している．ロシアとの定期的な交流はないが，昨年，一昨年とロシア人の高校生が本校を訪問し，日本文化体験や生徒との交流，ホームステイを経験した．

Ⅱ．ロシア語の授業について

ロシア語の授業は1, 2年生が必修で週に2単位，3年生は英語との選択であるが，こちらも週に2単位である．3年生でロシア語を選択する生徒は毎年5～6名程度であり，進学後もロシア語を学ぶ予定の生徒が選択することが多い．

基本的には教科書「初級ロシア語20課（白水社)」に基づいて進めているが，ハンドアウト等を別途作り，高校生のレベルに合わせて語彙や表現を増やしている．前述の通り，本校ではロシアの高校や大学とは定期的な交流がなく，その年によって高校生の訪問団が来校したり，しなかったりとまちまちである．昨年は初めてロシア人高校生のホームステイを受入れ，ロシア語の授業にも参加してもらった．

Ⅲ．拠点校事業での取り組み

III-1 授業に取り組んだ学年及び発表方法

拠点校事業での取り組みとして，ターゲットを3年生のロシア語選択者（5名）とした．格変化は一通り学習を終え，彼らが青森で実際に使えるロシア語の場面を考えてみることにした．青森市は，ここ数年クルーズ客船が多く寄港しており，市内を歩く外国人観光客も増えてきている．ロシア人観光客を目にすることも以前に比べると多くなってきた．そこで，これまでの学習のまとめとして，自分たちの住む青森市の紹介をすることにした．ロシア人を前にして発表する機会はないが，昨年ホームステイを受け入れたペテルブルクにある583番学校のロシア語の先生と話し合い，相互に町紹介のビデオを作り，送り合う形で交流することにした．本校はパワーポイントを用いた発表の様子を送ることにした．

III-2 ビデオの準備

青森市紹介にあたり，まずは自分たちで「ロシア人の高校生に紹介したい場所」を選んだ．ビデオを見る相手が高校生ということもあり，高校生目線のプランを立てることにした．結果とし，

「東京オリンピック・パラリンピックに向けた言語運用」
――関東国際高等学校・2017年取り組み――

永沼　栄理子

Ⅰ．関東国際高等学校について

I-1. 学校概要

「世界に繋がる教育」を目指し，自国のみならず他国の教育･生活･歴史などを理解し視野を広め，国際社会に貢献するための教養とマナーを身につけることを教育理念に掲げている．現在は普通科（文理･日本文化コース），外国語科（英語･中国語･ロシア語･韓国語･タイ語･インドネシア語･ベトナム語コース）の2学科9コース制をとる．

I-2. ロシア語コースについて

1991年4月設立．極東連邦大学の協力を得て発足し，ロシアの歴史や文化の指導を通して，ロシアをより深く理解できる人材の育成を目指す．

1コマ45分授業で，1年次は週に5単位，2年次は6単位，3年次には必修4単位に加え選択科目を含めると最大10単位の授業が設けられている．本年度のロシア語コース在籍生徒数は，1年生13名，2年生19名，3年生17名となっている．専任の日本人教員による授業に加え，ネイティブ教員による授業が各学年週に2コマずつ確保されている．卒業後はほぼ全員が国内外の4年生の大学に進学し，ロシアの大学へ留学する生徒もいる．ロシア･ウラジオストクにある極東連邦大学と提携しており，毎年2年生の終わりにロシア語コースの生徒は希望制でロシアへの短期留学プログラムに参加することができる．また，2016年度より長期交換留学プログラムが開始され，本校に在籍しながら極東連邦大学附属校にて9ヶ月間学ぶことができる．

I-3. ロシア語コース各学年の年間到達目標

1年生：ロシア語の文字，初級文法の習得．ロシア語およびロシアに対する興味・関心を引き出し，自ら学ぶ意欲を高める．よく使われる会話表現を身につけ，実際の場面で運用できる能力を向上させる．外国語でコミュニケーションすることの楽しさを経験させ，短期留学参加への意欲付けを行う．

2年生：ロシア語の語彙を増やし，初級文法をさらに深める．聴解力・語彙力・表現力を広げるとともに，ロシア語検定4級の取得を目指す．よく使われる会話表現を身につけ，実際の場面で運用できる能力を向上させる．短期留学にむけて日常生活で頻繁に使われるフレーズを繰り返し学習し，ロシア語での生活にスムーズに入れるようにする．

3年生：初級文法の知識を定着させ，運用能力を高める．読解力，聴解力，表現力を向上させる．ロシアに関する興味･関心を高め，大学進学後もロシア語を継続して学習する意欲を高める．ロシア語検定3級取得を目指す．

5技能について本校では各学年の年間到達目標を以下のように定めている.

	1年生（Pre～A1）	2年生（A1）	3年生（A2～B1）
読む	キリル文字で書かれた文章を正しい発音で音読できる.	身近なテーマについて辞書を用いながら要点を理解できる.	身近な事柄について平易なロシア語で書かれた文章を細部まで理解できる.
書く	アルファベットの大文字，小文字を活字体で書くことができる. 自分のことについて簡単な語句や文で書くことができる.	身近な事柄について簡単な語句や文を用いて書くことができる.	身近な事柄について簡単な語句や文で自分の意見を書くことができる.
聞く	挨拶や短い指示を理解することができる. 身近な事物を表す単語を聞き取ることができる.	身の回りの事柄に関する短い会話や説明の要点を理解できる.	身近な話題に関する比較的長い文章の要点を理解できる.
話す （やりとり）	日常の挨拶をしたり，挨拶に応答することができる.	身近な話題について簡単な質疑応答ができる.	身近な話題について情報や意見を交換することができる.
話す （発表）	定型文に単語を当てはめて簡単な自己紹介ができる.	身近な話題について発表内容を準備し，簡単な文で意見を述べることができる.	身近な話題について自分の意見を述べることができる.

Ⅱ. 東京オリンピック・パラリンピックに向けた渋谷区内の取り組み

II-1. 活動のねらいと概要

ロシア語教育を中心に，東京渋谷地域内の教育機関（小・中・高・大）の横断的な連携関係を築き，2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催時に，地域の青少年が主体的に外国語ボランティアを実施できるよう，教育機関を整備していくことを目標としている．ロシア語学習会や大使館，渋谷区役所など関係機関訪問，ロシア語対応のマップ作りなどに取り組む予定である．

併せて，本校ロシア語コース1年生の年間目標である「ロシア語およびロシアに対する興味・関心を引き出し，自ら学ぶ意欲を高める」「外国語でコミュニケーションすることの楽しさを経験させ，短期留学参加への意欲付けを行う」を達成することを念頭に，ロシア人留学生との交流を通じて自らの学びを実践する機会を与え，この交流が今後の学習にどのように効果的に働くのかを検証することを目的にキックオフミーティングを実施した．

II-2. キックオフミーティング

11月17日（金）　渋谷区立原宿外苑中学校にて，「ロシア」をキーワードに地域内の青少年が集い，関心を高めることを目標に，ロシア人を交えての交流会を実施した．参加者は，渋谷区立原宿外苑中学校3年生101名，関東国際高校1年生12名，ロシア語を学習している上智大学，法政大学，津田塾大学学生7名，ロシア人留学生8名．

交流会では，ロシア人留学生によるロシアの紹介や，ロシア語での挨拶，また本校生徒主体で，「お菓子」「住居」「スポーツ」「学校生活」「年中行事」「日常の食事」の6つのテーマにわかれ，グループ活動を行った．交流会の準備として，本校生徒は事前に既習の文法を用いてロシア語で自己紹介をする練習をし，また，グループ活動の場で司会者としてロシア人と中学生との間をつなぐ役割を担うため，テーマごとに，ロシア人に聞きたい質問を考え，文化理解をはかった．



交流会当日の様子
（左）グループワーク
（下）ロシアの遊び “ручеёк”

II-3. 成果と課題

本校生徒のロシア語学習面での成果としては，ロシア語を学ぶ生徒が地域の中学生や大学生と交流し，さらには実際にロシア人の生のロシア語を聞くことで，学習に対するモチベーションを高めることに繋がったことが挙げられる．

この交流会後，本校ロシア語コース全学年（1年生13名，2年生17名，3年生13名）を対象に，ロシア語学習に関する意識調査アンケートを実施した．以下，その一部を抜粋して紹介する．

質問1. 実際にロシア人との交流の機会があり，その経験後ロシア語学習のモチベーションがあがったか

（※交流会に参加したのは1年生だが，2年生は17名中8名がロシア人との交流の機会あり，3年生は13名中11名が短期留学にてロシア渡航経験あり）

1年生	2年生	3年生
92%	75%	83%

質問2. 高校を卒業してもロシア語を続けたいか

1年生	2年生	3年生
77%	70%	60%

質問3. 将来ロシア語を使って仕事をしてみたいか

1年生	2年生	3年生
84%	30%	69%

質問4. ロシア語の授業が好きか

1年生	2年生	3年生
100%	70%	85%

アンケート結果から，クラスのほぼ全員がロシア人との交流機会があった1年生，3年生のロシア語授業へのモチベーション，将来の活用志向が高いことが見てとれる．

また，1年生と2年生を対象に，ロシア語の基本動詞20個の意味を答える単語テストを抜き打ちで実施したところ，1年生の平均正答数が13個，2年生は11個と，わずかながらではあるが1年生の正答数が2年生のそれを上回るといった結果があらわれた．このことから，実際にロシア人との交流の機会をもったことが，ロシア語学習へのモチベーションだけでなく，習熟度のアップにも繋がったと言える．

本事業の研究開発課題である「地域に貢献するロシア語人材育成」の面から見た成果としては，本校のロシア語教育が，3年後の東京オリンピックに向けた地域住民のロシアに対する関心を高めるきっかけになった点が挙げられる．この交流会に参加した中学生からは次のような感想が挙がった．

「ロシア語は英語と全然似ていないなじみのない言語だったが，ロシアという国が身近に感じられるようになった．」

「クリスマス，お正月など日本と同じ行事でもたくさんの風習の違いがあることがわかり，ロシアとの交流で外国の文化に触れられてよかった．」

今回の交流会を通じて中学生，高校生，大学生が「ロシア」をキーワードに，一定程度関係を築くことができた．今後は小学生～大学生（留学生含む）までが，主体的にボランティアチームを形成していくための緻密な関係機関との連携と教育的実践が必要である．小中学生が「単体」で地域の言語ボランティア活動を実施するには限界があるため，「縦の関係」の構築が，この限界を打ち破る突破口になると期待する．

東京の地下鉄駅構内などで，公益財団法人東京観光財団作成が作成する，複数言語で書かれた東京の観光公式ガイドが置いてあるのを見かけるが，用意されているのは英語，中国語，韓国語，フランス語，イタリア語，スペイン語，タイ語であり，その中にまだロシア語は含まれていない．東京オリンピック開催時には恐らく多くのロシア人，またロシア語を母語とするロシア周辺諸国の方々が来日するだろう．今後は，国立競技場周辺のマップ作りなど，日本を訪れるロシア語圏の方々のためのシステムづくりに取り組んでいきたい．また，3年後のオリンピック･パラリンピックを見据えた計画にとどまらず，その後の日露友好関係につながるような取り組みも今後視野に入れていきたい．

Ⅲ．ロシア語教育が高等学校外国語教育において果たす役割と意味

高校に入学する段階で，確固たる動機をもってロシア語コースを志願する中学生が日本にどれほどいるだろうか．毎年1年生の最初の授業でロシア語コースを選んだ理由を聞くが，はっきりと答えられる生徒は片手で数えられる程度である．では，そのような生徒たちに本校ロシア語コースでは何を求めるのか．まずは，始めた理由は何であれ，ロシア語という新たな言語，普通の高校生なら触れることがないであろう言語を学習していることに誇りを持ってほしいと考える．英語と同時間数がカリキュラムに組まれている本校では，生徒たちは3年間でロシア語の基礎を身につけ，また，様々なイベントを通じて語学を学ぶことの楽しさを感じている．3年間の学びの中から，ロシアについてもっと知りたい，研究したい，ということでロシア関係の大学に進学する生徒が多数おり，卒業生からは進学先でクラスにロシア語がある程度できる生徒がいることで，周囲にもいい刺激となって授業の質があがったと先生から言われた，ということを聞いた．

受験に必要な主要科目を学びながらの高校生相手にできるロシア語教育は，この言語を学ぶきっかけ作りにすぎないかもしれない．しかし，このきっかけの輪を広め，よりロシアに興味をもつ人材を育成する，というところに高校ロシア語教育は大きな役割を果たしているのではないだ

ろうか.

（ながぬま　えりこ　関東国際高等学校）

A（Прогулка по Аомори）と，プランБ（Такой разный Аомор）の2つのプランを作ることにした．場所を選択している際は，文化的な観光名所だけでなく，高校生に紹介することを考慮に入れ，カフェや写真映えのする場所を混ぜるようにしていた．

プランができた後は，個々に場所について調べ，スクリプトを作り，可能な限りロシア語にする作業をさせた．インターネット等で必要な単語を調べ自分なりに文章にさせるようにした．また，パワーポイントを用いての発表であったため，写真や動画等を上手く使うよう努めていた．ラーメン屋を担当した生徒は，食べている様子を撮影することにし，動画を埋め込むという工夫も見られた．更に，三内丸山遺跡に関しては，全員で赴いて，興味深い場所をそれぞれが説明し，一つの動画を制作した．

パワーポイント，動画，そしてスクリプトを見ずに発表する準備が整うと，やっと発表を撮影できる段階に入った．発表の様子の動画編集も，生徒自ら行い，なんとか動画が完成した．

Ⅳ．成果

初めての試みで慣れない作業も多く，思いの外時間がかかってしまったが，生徒はロシアの高校生が見てくれることをモチベーションに，最後まで積極的に取り組んでいた．たった5人で2つのプランを紹介すると生徒が決めたときは，1つに絞ったほうが良いかとも考えたが，うまく連携を取りながら，それぞれが自分の役割を果たし，1つのビデオを作ることができた．授業後，生徒たちからは「これまで知らなかった青森の魅力を再発見できた.」,「青森に関してロシア語で紹介できるようになったので，自信がついた」,「いつか青森に来たロシア人に話してみたい」という声があった．やはり直接的なものでないにしろロシア人との交流が含まれていること，そして，自分たちの町紹介という実践的なものであるといったことは，教師が思う以上に生徒にとってはやりがいがあるのだということを実感させられた．

ペテルブルクは本校が動画を送った１ヶ月に町紹介が届いた．学校の紹介も含まれており，生徒は食いつくように見ていた また，あちらの高校生の日本語のうまさに驚いていた．

Ⅴ．今後の展望・課題

今回の課題として，ペテルブルクからのビデオを見てゆっくり振り返りの時間をとれなかったことがあげられる．また，今回は普段からもロシア語が好きだという生徒だということ，そして何より人数が5人だけだということで，授業が進めやすかったのは言うまでもない．しかし，できればこの授業を必修の2年生で挑戦させたいと考えている．その際は能力，ロシア語に対するモチベーションも差が大きい40人の生徒と進めていくことになるため，時間の管理や指導にも更なる工夫が必要になってくる．しかし，3年生で見られたような積極的な取り組みは期待できるため，今後は学校紹介，町紹介と分けて下の学年でも取組み，生徒の自信と，ロシア語への更なる興味へつながるように授業をしていきたい．

（くどう　あやか　青森県立青森南高等学校）



プランを考えている様子



パワーポイント作成



三内丸山遺跡紹介



善知鳥神社紹介

平成29年度外国語教育強化地域拠点事業
――富山県立伏木高等学校の取り組み――

ボンダレンコ　オクサーナ

Ⅰ．はじめに

富山伏木高校は，文科省平成29年度外国語（ロシア語）教育強化地域拠点事業に拠点校として参加した．地域に貢献するロシア語人材育成につながる教育課程編成を目指し，ロシア語学習指導案･評価法確立のための基盤研究を行った．具体的には，地域貢献活動の一環として来校するロシア人に学校及び富山県の魅力を伝えるという1年間の目標を定め，種々の取り組みを行った．

Ⅱ．取り組み

II-1 取り組み1

3年生のクラスでは来校するロシア人に学校案内をし，ロシアの学校にないところを紹介し，魅力を伝えること，日本の様々な文化の体験（書道，琴，折り紙，茶道等）をさせることを目標にした．また，交流会のときに「夏休み」について話し合い，相違点や共通点を見つけることを目標の一つに定めた．その活動のために，指導案とルーブリック（ルーブリック①参照）を作成した．

2017年には，ロシアから三つの団体が伏木高校を訪問した．その結果，次のロシア人の団体に対して，学校案内を3回行う機会があった．

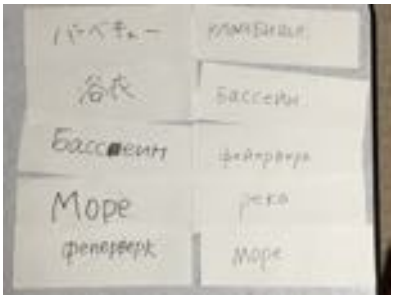


- 2017年7月7日
第57回富山県スポーツダンス大会への参加選手
（富山県スポーツダンス連盟）
- 2017年7月11日
日本語学習青年団
（日露青年交流センター）
- 2017年9月26日
ウラジオストク市の友好高校からの交流団

準備にあたり，生徒たちはルーブリックの評価対象にした項目をしっかり意識して原稿作成と発表に臨んだ．内容，気持ちがロシア人に大いに伝わった．発表の後，ロシア人から拍手をもらった生徒は特にやり甲斐を感じ，とても嬉しそうだった．

授業では，交流会を行い，その時に夏休みについて話し合った．まず，ロシア人同士と日本人同士の二つずつのグループに分かれ，それぞれのグループ内で話し合い，「夏休み」を連想させる五つの単語をピックアップしてもらった．その時に日本人グループの回答と，ロシア人グループの回答に共通点が見られた．教師を通して，なぜその単語を選んだか，生徒の説明を聞いて，相手に訳した．

日本の生徒の回答



1）バーベキュー，浴衣，プール，海，花火
2）お墓，プール，花火，川，海

ロシアの生徒の回答



1）ヨット，青少年キャンプ，サーフィン，海，帽子
2）旅行，夜の散歩，ダイビング，青少年キャンプ，日焼け

話し合いの後，ロシア人と日本人の混合グループに分かれ，さらに事前に日本の生徒が用意した質問をロシアの生徒に聞いて，日露における夏休みの過ごし方や学校生活について理解を深めた．後日，すでに知っていたこと，新しく得た情報を日本語の作文にまとめた．その作文も評価対象とした．

3年生の活動の成果：

- 自分の学校のいいところを再認識できた．
- 夏休みの過ごし方について，お互いに様々な発見，驚きがあった．ロシアと日本の高校生の夏休みについて共通点，相違点に気づくことができた．
- 気付いた点について日本語でまとめることができた．

その活動を通して行った評価は次の表にまとめた．

評価項目	満点	平均点
（学校案内）日本語の原稿の内容	10	7.4
（学校案内）原稿の露訳	20	12.8
（発表）ルーブリックで評価（講師による評価）	24	19
夏休みについての作文	10	7.5

II-2 取り組み2

2年生のクラスでは，来校するロシア人の生徒たちに富山県の魅力，見所についてスライドを使って紹介することを目標にした．初めて日本を訪れるロシアの生徒が多いことを考慮して，紹介するポイントを選ぶように，また日本にホームステイしている間にどこに連れていきたいか，何を見てもらいたいか等をロシア人の立場になって考えて，内容を作成するように指示した．この活動を実施するにあたって，指導案とルーブリック（ルーブリック②参照）を作成した．

生徒はルーブリックの評価対象にした項目を十分意識して，限られたロシア語能力の中でも，創造力を使って，話の流れがわかる内容を構成できた．

準備期間は限られていたが，次の手順で進めた．

1．語彙選定，学習	5．翻訳作業
2．グループ形成	6．発表のリハーサル
3．原稿作成	7．本番
4．スライド作成	8．振り返り

各手順について，以下により詳しく紹介する．

1. 語彙選定，学習

富山の見所について紹介するのに，どんな語彙が必要になってくるか，まず生徒と話し合って，選定した．様々な語彙導入方法（カード，スライド等）を用いて，生徒に覚えてもらうように努めた．間に2か月の期間を空けて，2回単語テストを行った．2回目のテストについては，事前に予告せずに行ったにもかかわらず，1回目のテストと比べて高い点数を上げていた．時間が経つにつれて，新しい語彙が定着したと考えられる．

評価項目	満点	平均点
単語テスト（1回目）	20	11.3
単語テスト（2回目）	20	14

2. グループ形成

生徒が紹介したい場所（物など）のリストを作成し，教師はそれをもとにして，グループを形成した．

3. 原稿作成，4. スライド作成

コンピュータールームで，日本語の原稿を書きながら，スライド作成に取り組んだ．残念ながら，地元のことにあまり関心がない，分からないことが多い生徒が目立つ．そのために，日本語でも原稿を書くことが困難であった．インターネットの情報源を利用して，紹介したいものについて情報を得ることで，スライドを作成することができた．

5. 翻訳作業

グループによって，作業の仕方に大きな違いが見られた．限られたロシア語能力の中でも，創造力を使って，話の流れがわかる内容を構成できたグループもあれば，完全に教師を頼りにして，ロシア語の原稿を作ったグループもいた．

6. 発表のリハーサル

ロシアの生徒たちが来る前日に，発表のリハーサルを行った．その時には，発表の様子を録画して，改善すべきところに気づかせるために，その場で生徒に動画を見せた．

7. 本番

本番当日，リハーサルの時に気づいた点に配慮しながら，発表に臨んだ．ロシアの生徒たちは，日本の生徒たちの発表に関心を示し，必ずしも流暢とは言えないロシア語であったにもかかわらず，注意深く耳を傾けて，うなずいたり，質問に答えたり，質問をしたりしていた．





8. 振り返り

本番の時に撮った動画をクラスに見せ，ルーブリックそれぞれの発表者の評価を各自でするという作業を行った. 結果として, 教師の点数と生徒がつけた平均点が大きく変わらなかったため，大いに意味がある活動だったと思われる.

	満点	平均点
ルーブリックで評価する（生徒による評価）	12	11.2

動画を見ながら，ルーブリックで採点するだけではなく，ポストイットを使って，一人ひとりが発表者にコメント（①いいところ，②改善すべきところ，③アドバイス）を書いて，その場で渡した．中に次のようなコメントがあった.

- ジェスチャーナイス
- 声が大きくていいと思った
- スムーズでした
- パワーポイント有効活用してよかった
- 聞き取りやすく伝わってきた
- スライドがよかった
- 表情がとてもいいと思った
- 言葉と言葉の間がちゃんと空いていて聞きやすかったです.
- ノートを見ないで言えたら，もっと良かった

振り返りのアンケート調査も行った．アンケート項目の一つ「授業をふりかえり，自分にとってどのような学習だったかをまとめなさい．知識･情報（何を知ったか)」に対して，ロシア語の知識が増えたという回答もあったが，自分が住んでいる町についてたくさんのことを知ることができたという回答も多かった．その活動は語学の側面からも，社会事情・歴史等の側面からも，生徒にとってとても有意義なものだったと思われる．アンケート回答の中には次のようなコメントがあった.

- 新しいロシア語を知ることができた.
- 教科書にでてきていない単語や文法を知れた.
- コロッケがどういった語源でそうなったかを知った.
- 富山県の観光名所や有名な食べ物など改めてみんなの発表を見て知った.
- 富山に住んでいるけど，自分の知らないことがいっぱい知ることができた.
- 富山県立美術館ができたことを知った！富山県民なのに知らなかったけど，これをきっかけに知ることができた.
- 富山県の魅力を再認知しました.

2年生の活動の成果：

- 地元の富山県について新しい知識を得た.
- 町紹介に使えるたくさん新しいロシア語の単語を覚えることができた.
- ロシア人が日本で何に興味を持っているかが分かった.
- ウラジオストクのおすすめのスポットを少し知ることができた.

II-3 取り組み3

富山大学の呉人恵教授及びM.カザケーヴィチ教授の協力によって，伏木高校の生徒は留学体験がある富山大学人文学部学生と交流し，大学と高校の連携を図ることができた．学生たちは，まず初めにスライドを使って，留学に行った大学，旅行に行った町，ロシアの友達と過ごした時間等について，プレゼンテーションしてくれた．その後，グループに分かれて，生徒たちの質問に答えたり，いろんな思い出話，笑い話を聞かせたりしていた．この活動は地元の新聞にも取り上げられた．



2017年10月27日 12:11

ロシア留学楽しいぞ　伏木高で経験学生が魅力紹介

チェック　ツイート　いいね！0　G+

ロシア留学経験のある富山大生４人が２７日、高岡市伏木一宮の伏木高校で模擬授業を行い、留学の楽しさとロシアの魅力を語った。

文科省の「外国語教育強化地域拠点事業」の一環として同大が実施。同校がロシアをはじめ、世界各国の友好校と語学研修などを行っていることから実施先に選んだ。同大人文学部４年の森川初美さん（２１）、中野歩美さん（２２）、大川颯人さん（２１）、川村桃子さん（２３）が講師を務めた。

大川さんはモスクワでの生活を紹介。「地下鉄では約６０円を支払えばどこでもいける」「公園では市民が雪の中でバレーボールをしていた」などとエピソードを語った。

川村さんは「意外と知られていないロシアが、面白い国だと気付くきっかけになっていればうれしい」と話した。

webun 北日本新聞（2017年10月27日）
http://webun.jp/item/7411056

普段あまり会うことがないロシア語学習者の日本人の先輩と話し合うことで，ロシアについての生の声を聴くことができた．言葉の壁を感じるロシア人と異なり，和気あいあいと意見交換することで多くの発見があったようだ．



振り返りのアンケートに「今回聞いてなかったけど，今度何を聞いてみたいか」という質問に対して，多くの質問が書かれた．後日，学生からもらった回答を生徒に紹介した．この交流は高校生にとって，きっといい刺激になったと思われる．

アンケートの中から

- どうやったらロシア語がうまく話せるか？どのように勉強したらいいか．
- 一番おいしかったロシアの料理は何か．食べれなかったロシア料理．

- ロシアに行ったら，ここだけは行けという場所は.
- ロシアでは日本料理を作ったか.（ロシア人の反応は？）
- もう一度ロシアに留学する機会があれば，行きたいか？
- 留学中に友達を作る方法.
- 将来どんな職業に就きたいのか.（ロシア語を生かせる仕事なのか）
- 留学に行ったときに，一番必要だったもの.
- ロシアでは一番人気の日本人？
- もしほかの国に行くとしたら.（どこに行きたいか？）
- ロシア語以外の言語を学んでみたいか.
- どうして日本ではロシアの知名度が低いのか.←考察
- ロシアでは留学している学生で一番多いのはどこの国.
- 将来，ロシア語はどのようなことに使えると思うか.
- ロシアでは危険な話.

Ⅱ．終わりに

成果：　必要なリテラシーを重視した内容を学習に絞り込むことができた．学習目標や具体的な習得可能性を明確なものとして学習者に実感させた．地元や母校などについては，機会がないとなかなか調べることがないが，今回の学習で学習者はこれらについて多くの新しい知識を得ることができた．また海外のロシア人に富山県の紹介・アピールができ，それら両面で，ロシア語教育が地域貢献の一助となったといえるであろう．地域の大学生との交流により，学習の長期的な展望，高校だけではなくロシア語学習を続けられるという確かな見通しを得ることができ，学習者のモチベーションを大いに高めることに役立った.

課題：　準備段階の評価方法について，発表の評価についてはさらに検証が必要である．今後は，より充実した言語活動を実施するための指導方法についてもさらに研究が必要である．地域について知識を得た生徒たちが，ロシア語を通してどのように地域に貢献できるかを考える必要がある.

（ぼんだれんこ　おくさーな　富山県立伏木高等学校）

ルーブリック①「私の学校」

評価基準	目標以上に達成 （4点）	目標を達成 （3点）	目標達成まで あと少し！ （2点）	目標達成まで 努力が必要 （1点）
内容 （わかりやすさ・ 構成）×2	「はじめ→中→まとめ」の流れがあって，聞き手に「なるほど」と思わせる.	「はじめ→中→まとめ」の流れがあり，分かりやすい.	「はじめ→中→おわり」のどれかが欠けている.	内容が整理されておらず，分かりにくい.
パフォーマンス 暗記の度合い	台本をまったく見ずに，スムーズに案内できた.	台本をときどき見ながらではあるが，スムーズに案内できた.	頻繁に台本に目をやり，スムーズな案内とは言えなかった.	ほとんど暗記できておらず，終始台本を読んでいた.
パフォーマンス （話し方・アイコンタクト・ 身ぶり手ぶり）	複数の相手の目を見て表情や抑揚を生かして，聞き手に語りかけている. 相手をひきつける身ぶり手ぶりも入れて案内した.	相手の方を見て，伝えようとする姿勢がある．相手の目を見て発表ができる. 必要な身ぶり手ぶりを入れながら案内した.	案内の言葉を言うことに一生懸命で，ときどき顔を上げることがあるが，相手の目をあまり見ない. 必要な身ぶり手ぶりが少なかった.	相手の方を見ることはなく，必要な身ぶり手ぶりもなかった.
パフォーマンス （声の大きさ）	声の大きさが十分でメリハリがある.	後ろの席の人にもはっきり聞こえる.	後ろの人には聞こえにくい.	ほとんど聞こえない.
パフォーマンス （発音）	明瞭な発音で，内容がはっきりと伝わる.	明瞭な発音で，言っていることはおおむねわかる.	明瞭さに少し欠ける. ところどころ聞き取れない.	明瞭さに問題があって，何を言っているのかわからないところが多い.
合計	/ 24			

ルーブリック②「町紹介」

評価基準	目標以上に達成 （4点）	目標を達成 （3点）	目標達成まで あと少し！（2点）
内容 （わかりやすさ・ 構成）	「はじめ→中→まとめ」の流れがあって，聞き手に「なるほど」と思わせる.	「はじめ→中→まとめ」の流れがあり，分かりやすい.	「はじめ→中→おわり」のどれかが欠けている.
パフォーマンス （読み方）	聞き手に語りかけている. 流れがぜんぜん止まらない. （つっかえない）	流れがほとんど止まらない.	流れが時々止まる.
パフォーマンス （声の大きさ）	とてもはっきり. メリハリがあり眠気も吹き飛ぶ.	はっきり. 自然に聞き取ることができる.	時々ぼそぼそ. 注意深く聞くことで聞き取ることができる.
総合点	/12		

平成29年度　外国語（ロシア語）教育強化地域拠点事業　最終報告　北海道札幌丘珠高等学校

研究開発課題

地域に貢献するロシア語人材育成につながる教育課程編成を展望した、ロシア語学習指導案・評価法確立のための基盤研究

取組内容

取組①
地域貢献を目指すプロジェクト学習の指導案を作成
-- 札幌の姉妹都市であるノボシビルスクからの教員による訪問団来日に合わせ、学校に招いてロシア語の授業見学や交流会を計画
→コンピューターや辞書による調べ学習
→自己紹介や交流で使う表現の習熟
→ロシア語による歌唱

取組②
地域貢献を目指すプロジェクト学習の指導案に適した評価法の検討と作成-
-- ①の指導案で示した目標に従ってルーブリックを作成

取組③
①と②を使って授業を実施し、交流会を実施
-- 日露風物カルタづくり
ーロシア語で日本の歌を披露
ーロシア語で学校紹介
-- 12/9/2017～12/10/2017に報告会と改善に向けた検討会を実施

成果①　**ルーブリック評価（達成内容と平均値）**
◯　ロシア人に伝わる声や発音で発表できた
〇　自己紹介を含む簡単な意思の疎通ができた
〇　目的に応じ教科書以外のロシア語を使えた
〇　自作のゲームを通じ、異文化理解につながった

演出(4点)	態度(2点)
3.0	1.5

成果②　**ルーブリック評価（達成内容と平均値）**
◯　限られた語彙力や文法力の他に、コミュニケーション能力や事前の準備で、ロシアの先生方と満足のいく交流ができた。
〇　意思を伝える相手がいる状況ができたことで、外国語が実践的に役立つことが認識できた

内容(4点)	生徒の感想
3.5	全員が楽しく取り組めたと解答

成果③
辞書やインターネットを駆使して、習っていない語彙や格変化を使って、与えられた課題を成し遂げる場面が見られた。何より、ロシア語を使って現地の人々と交流したいという気運が高まった意義は大きい。

研究の成果と課題

実際にロシアから学校の先生方15名を本校へ招く機会を得たことは、学習の動機付けとしての意義が大変大きなものであった。本校では3年次にロシア語を週2時間選択できるが、今年度受講者22名のうち、第1希望で選択した者はわずか6名であり、当初から授業に臨む姿勢は高いとはいえなかった。そんななかで異文化に興味を持たせ、主体的で深い学びを実現させるために、取り組みたいと思わせる目標の設定や、その目標に到達することで得られる達成感を、行事を通じて与えることができたことは幸運であった。交流後のアンケートでは、生徒全員が交流を印象深く受け止め、ロシア語学習への意欲が高まったと答えている。現在は交流をさらに発展させるために、先方の生徒とSNSでのやりとりやクリスマスカードの交換に取り組み始めている。今後の課題は、3年次から学習が始まるため、交流へと発展しても生徒がすぐに卒業してしまうことや、高い語学力の育成にまで到達できないことである。

青森県立青森南高等学校

研究開発課題

地域に貢献するロシア語人材育成につながる教育課程編成を展望した、ロシア語学習指導案・評価法確立のための基盤研究

取組内容

取組①

・自分の住む地域の紹介
　高校生の視点でロシア人の高校生に勧めたい場所を選び紹介する
【読む・書く・話す力を総合的に伸ばす】

取組②

・ルーブリックを用いた評価
　文章の構成～発表までをルーブリック形式で評価する

取組③

・ICTの活用により、ロシアの生徒と日本の生徒が互いの発表の様子を見て、意見を伝える相互交流を絡めた授業の実施。

成果①　生徒の語彙が増えた

アンケート結果より

取組前、生徒が知っていた語数　　7.8語
（青森市紹介に必要な語彙）

取組後、生徒が覚えていた語数　　15.8語

成果②　生徒のロシア語に対する自信がついた

アンケート結果より

	ある	ややある	どちらとも言えない	あまりない	ない
取組実施前	0名	1名	0名	3名	1名
取組実施後	1名	3名	0名	1名	0名

「青森に関して案内できる場所がある」という実績ができたことより、全体として自信がついたものと思われる。

成果③　相手を意識して話そうとすることで、改善する点が多い

・日本の固有名詞はゆっくり話そうとする
・発音や表現に関して、ALTに発音を聞きに行くなど積極性が高まった。
・名詞の格変化を自分で推測するようになった。

研究の成果と課題

ロシア人の生徒に自分の住んでいる町を紹介するというのは初めての試みであったが、生徒はロシアの高校生に発表するということを目標に最後までモチベーションを高く保つことができたと感じた。教科書で皆同じ文章を見るのではなく、それぞれの生徒が自分の発表のために必要なロシア語を調べ、できる限り文章にするというステップでは、ロシア語という言語の構造にこれまでになく深く向き合う時間がとれたと感じる。ルーブリックを用いた評価を入れたことで、教師も生徒もどの点に注意しながら発表の準備をすれば良いのかを共有しながら進めることができた。ただ、今回の発表は5名しかいない授業で行ったため、一人一人に目を配りながらできた部分がある。将来的には取り組む学年を下げ、40人のクラスで挑戦することを考えると、今回のままでは効率よく進まないことが容易に想定される。効果的に進める方法の研究、また、相手の学校との綿密な相談もますます必要になってくると考えられる。

関東国際高等学校

研究開発課題

ロシア語教育を中心に、東京渋谷地域内の教育機関（小・中・高・大）の横断的な連携関係を築き、2020年の東京オリ・パラ開催時に、地域内の青少年が主体的に外国語ボランティア活動を実施できるよう、教育的環境を整備していく。

取組内容

取組①―地域内横断的教育事業組織の構築―

渋谷区内の教育機関が連携して、ロシア語・ロシア文化に親しむことのできる「交流会」を企画・運営する。

取組②―授業実践(高校)―

関東国際高校ロシア語コースの1年生を対象に、交流会に向けた準備を行う。ロシア語による自己紹介や、ロシアの文化・生活について調査作業を行う。

取組③―授業実践(中学校)―

渋谷区立原宿外苑中学校の3年生を対象に、交流会に向けての事前学習を実施。衣食住やポップカルチャー、学校生活など、テーマごとにロシア人に対しての質問事項を列挙し、ロシアについての関心を高める。

成果①

参加者：原宿外苑中学校3年生101名、関東国際高校1年生12名、上智大学、法政大学、津田塾大学学生7名、ロシア人留学生8名。
「ロシア」をキーワードにして、地域内に中・高・大・留学生という縦のつながりを構築することができた。
交流会プログラム：ロシア語の挨拶、ロシア文化についてグループワーク、ロシアの簡単なゲーム

成果②

実際に教室の外に出てロシア語を話す機会を得たことで、ロシア語学習への意欲が高まった。ロシア文化について新たな知識を得られたと同時に、日本との文化比較で、日本のことをどう外国人に説明すればよいか考えることができた。

◇高校を卒業してもロシア語の勉強を続けたいという生徒の割合◇

現1年生	現2年生	現3年生
77%	70%	60%

◇ロシア語の授業が好きと答えた生徒の割合◇

現1年生	現2年生	現3年生
100%	70%	85%

★今回の交流会を機にロシア語学習へのモチベーションはあがったか？★
YES:11人、NO:1人

成果③

原宿外苑中学校3年生101名が、事前に考えた質問をロシア人に投げかけることで中学生も主体的に交流会に参加し、ロシアについて何も知らなかった状態から、挨拶や生活文化などの知識を得て、ロシアを身近に感じられたといった感想があがり、興味を持つきっかけとなった。

研究の成果と課題

学生、高校生、大学が「ロシア」をキーワードに、一定程度関係を築くことができた。今後は小学生～大学生（留学生含む）までが、主体的にボランティアチームを形成していくための緻密な関係機関との連携と教育的実践が必要である。小中学生が「単体」で地域の言語ボランティア活動を実施するには限界があるため、「縦の関係」の構築が、この限界を打ち破る突破口になると期待する。
本校でロシア語を学ぶ生徒が地域の中学生や大学生と交流し、さらには実際にロシア人の生のロシア語を聞くことで、学習に対するモチベーションを高めることに繋がった。また、本校のロシア語教育が、3年後の東京オリンピックに向けた地域住民のロシアに対する関心を高めるきっかけになった。今後は、国立競技場周辺のマップ作りなど、日本を訪れるロシア語圏の方々のためのシステムづくりに取り組んでいきたい。

平成29年度　ロシア語教育強化地域拠点事業　最終報告　富山県立伏木高等学校

研究開発課題

地域に貢献するロシア語人材育成につながる教育課程編成を展望した、ロシア語学習指導案・評価法確立のための基盤研究

取組内容

取組①　日露交流のための指導案と評価ルーブリックの作成（3年生）
-- 留学体験がある富山大学人文学部学生と交流、ロシアについての生の声を聞くと共に、高大連携を図る。
-- 来校するロシア人生徒に3年生が学校案内をするための指導案を作成。
-- 上記の指導案に従って、ルーブリックを作成。

取組②　日露交流のための指導案と評価ルーブリックの作成（2年生）
-- 留学体験がある富山大学人文学部学生と交流、ロシアについての生の声を聞くと共に、高大連携を図る。
-- ロシア人訪問団に富山県の魅力、見所について紹介するための指導案を作成。
-- 上記の指導案に従って、ルーブリックを作成。

取組③　①と②を使って授業実践、成果発表
-- 3年生がロシア人生徒に学校案内。日本の文化体験（書道、琴、折り紙、茶道等）をさせる。交流会で「夏休み」について話し合い、相違点や共通点を見つける。
-- 2年生がロシア人生徒に富山県の魅力、見所についてスライドを使って紹介。
-- 12/9/2017～12/10/2017に報告会と改善に向けた検討会を実施。

成果①
生徒はルーブリックの評価対象にした項目をしっかり意識して原稿作成と発表に臨んだ。内容、気持ちがロシア人に大いに伝わった。

	満点	平均点
日本語原稿の内容	10	7.4
原稿の露訳	20	12.8
ルーブリック評価（講師の評価）	24	19
夏休みについての作文	10	7.5

成果②
生徒はルーブリックの評価対象にした項目を十分意識して、限られたロシア語能力の中でも、創造力を使って、話の流れがわかる内容を構成できた。

	満点	平均点
単語テスト（1回目）	20	11.3
単語テスト（2回目）	20	14
ルーブリックで評価する（生徒による評価）	12	11.2

成果③
日本人の先輩、ロシア人の生の声を聴くことができた。関心が高まった生徒がいれば、言葉の壁の高さを実感した生徒もいる。
言いたいこと、言われていることが通じるときの喜びを覚えた。
発表準備の協働作業の重要性が分かった。

研究の成果と課題

成果：必要なリテラシーを重視した内容を学習に絞り込むことができた。学習目標や具体的な習得可能性を明確なものとして学習者に実感させた。地元や母校についてなど、機会がないとなかなか調べることがないが、今回の学習で学習者はこれらについて多くの新しい知識を得ることができた。また海外のロシア人に富山県の紹介・アピールができ、それら両面で、ロシア語教育が地域貢献にも役立ったといえるであろう。地域の大学生との交流により、学習の長期的な展望、高校だけではなくロシア語学習をその先に続けられるという確かな見通しを得ることができ、学習者のモチベーションを大いに高めることに役立った。

課題：準備段階の評価方法について、発表の評価についてはさらに検証が必要である。今後は、言語活動を高めるための指導方法について、更なる研究が必要である。地域について知識を得た生徒たちが、さらに、ロシア語を通してどのように地域に貢献できるか考える必要がある。

平成29年度　外国語（ロシア語）教育強化地域拠点事業　最終報告　大阪大学

研究開発課題

地域に貢献するロシア語人材育成につながる教育課程編成を展望した、ロシア語学習指導案・評価法確立のための基盤研究

取組内容

取組①　地域貢献を目指すプロジェクト学習の指導案・評価法を作成、ロシアからの訪問団との交流会に向け、学校紹介や各種イベント等与えられた課題を達成するための準備活動、当日の課題達成、事後にロシア側生徒とSNSやカード交換で取り組みをさらに発展。

取組②　ロシア人高校生へのわが町紹介という取り組みに向け、指導案、評価法を作成。取り組みを展望した授業活動を通じて、5技能の総合的な育成と評価を実現。また実際の交流後にICTの活用により、双方向的な意見交換を行う授業を実施。文章構成から発表までをルーブリック形式で評価。

取組③　2020年の東京オリ・パラ開催時ロシア語ボランティア活動実施に向け、地域内教育機関（小・中・高・大）の横断的連携構築の第1歩として、ロシア人を交えた機関合同交流会を企画・運営。 実施に向け文化比較を踏まえた自律的調査活動、表現練習などのグループワーク活動を展開。

取組④　ロシア人訪問団に対する富山県の見所・魅力紹介、文化体験イベント実施等の取り組みに向け、指導案と評価ルーブリックを作成。発表に向けた原稿作成・プレゼン練習等、5技能を使った授業活動を展開。実際の交流会での取組実施。富山大学生との交流会を実施、卒業後のロシア語学習の展望を生徒に理解させる。

成果①　◎生徒のロシア語力、特に「書く・話す・聞く」能力の向上

必要なリテラシーを重視した内容に学習を絞り込み、具体的な課題状況を作ることで、生徒のロシア語力、特に「書く・話す・聞く」能力が向上し、また実践を通してそれらを創造的に使用する力を養うことができた。

	満点	平均点
日本語原稿の内容	10	7.4
原稿の露訳	20	12.8
ルーブリック評価（講師による評価）	24	19
夏休みについての作文	10	7.5

成果②　◎生徒のロシア語学習意欲・学習に対する有能性が向上

地域連携・異文化交流等の課題達成型授業活動の展開及び協働作業により、生徒の学習意欲・学習に対する有能性が向上した。

★ロシア語に対する自信はあるか？

	ある	ややある	どちらとも言えない	あまりない	ない
取組実施前	0名	1名	0名	3名	1名
取組実施後	1名	3名	0名	1名	0名

★今回の交流会を機にロシア語学習へのモチベーションはあがったか？★
YES:11人、
NO:1人

成果③　◎教育機関の縦の連携により学習の長期的展望を生徒が実感

中・高・大等の教育機関の縦の連携により、学習の長期的展望を生徒が実感し、また各機関の生徒やさらには地域住民に対し、多言語・多文化に対する関心・理解を高めるきっかけを作ることができた。

◇高校を卒業してもロシア語の勉強を続けたいという生徒の割合◇

現1年生	現2年生	現3年生
77%	70%	60%

研究の成果と課題

地域連携・異文化交流事業などを授業に積極的に取り入れることを目標に、それに向けた課題達成型授業活動の指導案・評価法を確立した。それらの指導案に基づく授業活動を展開する過程で、必要なリテラシーを重視した内容に学習を絞り込み、具体的な課題状況を作ることで、生徒の自律的な学習活動が格段に進み、言語表現習得においても構造・意味により深い関心を持って臨む態度が養われ、全般的ロシア語力、特に「書く・話す・聞く」能力が向上した。また実際にイベントを協働作業で企画運営、実施する中で、生徒の学習意欲・学習に対する有能性が向上した。ルーブリックを用いた評価を取り入れたことで、教師と生徒が課題のどの点に注意すべきかを共有しながら、授業活動を組み立て進めることができた。プロジェクトベースの授業計画、指導案作りがなされたが、今後、5領域の言語活動がどのような配分でなされるべきか、どのような言語材料を使用するか等の細部について検討の必要がある。評価については、学習者自身の自己評価と教師からのフィードバックなどの積み重ねによる継続的評価システムを作り上げるまでには至っておらず、また準備段階の評価方法、発表の評価についてはさらに検証が必要である。

第２部
評価　今後の展望

プロジェクト型授業に見られる「学び」の評価について
――客観的評価とCAF分析――

横井　幸子

Ⅰ．はじめに：日本のロシア語教育におけるプロジェクト型授業と評価方法

日本にはロシア語が開講されている高等学校が30校あるが（国際文化フォーラム, 2016），歴史的に英語を偏重してきた日本の外国語教育ではロシア語教育は政策的に周縁化されており，ロシア語教員の確保，カリキュラムの策定，教科書や教材の選定や開発，授業運営に至るまで，ほぼ全面的に各学校の裁量に任されてきた（e.g., 林田2014, 臼山2000）．そもそも，ロシア語開講に至るのは，地理的･歴史的･経済的にロシアと関わりを持ってきた，あるいは持ちたいという地元からの要請があるなど地域主導の積極的な事情や経緯があってのことであり（臼山2000; 2003），実際に定期的にロシアと交流している学校が少なくない．つまり，日本の高校のロシア語教育は，日露交流を軸としたプロジェクト型の授業を実施する動機や土壌が整っているということである．このような状況を踏まえ，本プロジェクトではより地域とのつながりを意識し，「地域に貢献するロシア語人材育成」を目標語学習指導案と評価法の確立を目指した．プロジェクト1年目である今年度は，拠点校に選ばれた4校全てで日露交流を軸とするプロジェクト型授業のための指導案を作成し，授業を実施した．評価についても，ルーブリック評価を採用し全拠点校にて実施された．ルーブリックを作成し活用することによって，各学校の事情に合わせて文法や語彙と言った言語面だけでなく，学習者の意欲や態度についても評価対象とすることができ，より総括的に評価できることが示唆された．

上記のようなプロジェクト型の授業を実施した結果，いくつかの課題も明らかになった．中でも取り上げたいのは，学習者の言語面での「学び」，すなわち言語習得が具体的にどの程度進んでいるのか，という問題である．プロジェクト型の学習の場合，ロシア語習得そのものというよりは，ロシア語を使って何ができるようになるのかを目標として設定するため，教室内外で実施される様々な活動が必ずしも狭義のロシア語習得を目的にしている訳ではない．授業の性格上，当然評価についても実際の学習経験，学習過程を文脈に応じて幅広く評価対象としてより総括的に評価することになる．このようなロシア語を使う活動を重ねた結果として，実際にどのようなロシア語習得が達成されているのだろうか．そもそも，このようなプロジェクト型授業で学習されるロシア語は，例えばTRKIといった客観的なロシア語能力試験で求められるロシア語と比較してどのような相関性が見られるのか．

本報告では，本プロジェクト拠点校の一つで生徒たちによって製作された町紹介ビデオを文字起こしし，彼らの産出した学習者言語を1）客観的ロシア語能力試験（TRKI）で設定されているロシア語能力レベルに照合し，さらに2）Ellis and Barkhuizen (2005), Larson-Freeman (2009)らに従い，学習者言語のCAF分析を行い，学習者の産出する第2言語を複雑さ（Complexity），正確さ(Accuracy)，流暢さ（Fluency）から明らかにする．

Ⅱ．データ

本報告でデータとして取り上げたビデオは，ロシア語学習歴2年半（撮影当時）の高校3年生5人によって製作された．彼らは入学時から週2回，大学でロシア語を専攻した日本人教員とロシア

人のALTから第２外国語としてロシア語を学んできた．彼らの通う学校のロシア語カリキュラムを参考にして概算すると，ロシア語学習時間は150–200時間近くになると思われる．単純計算すると，これはTRKIでは初級レベルに到達できる可能性があるレベルと思われる．

15分24秒のビデオの中で，生徒たちはスライドを見せながら自分たちの町をロシア語で紹介している．紹介内容には，当地の特産物や食べ物，おすすめのレストランや観光地などが含まれる．その内のレストランと博物館には自分たちが実際に出向いてビデオを撮影し，紹介ビデオを製作し，そのビデオを見せながら解説する場面も2カ所見られた．尚，プレゼンテーション内で紹介されていたビデオ内のテクストも含めて，本ビデオで文字起こしした語数は831語であった．

Ⅲ．分析結果

III-1. TRKIの視点から

まず，文字起こしされたロシア語を，TRKIで設定されている語彙リスト（Андрюшина 2011; 2013, Андрюшина и Козлова 2011; 2012），文法リスト（林田2009）に照らし，どの程度カバーされているのか，検討した．以下に，ビデオ内で使用された語彙について品詞毎に語彙分類表を作成し，TRKIの各レベルで想定されている語彙リストと比較してどの程度重なっているか，そのカバー率を示す．尚，代名詞や接続詞，前置詞などは頻出しているものの，名詞や動詞など他の品詞に比べて語彙分類の広がりは限定的であると思われることから，今回の分析対象からは外している．

表1．品詞毎の語彙分類表

<table>
<tr><td>名詞（計270語/内，固有名詞が79語）</td><td>語彙のカバー率（固有名詞を除く）
TRKI初級レベル　64%
TRKI基礎レベル　70%</td></tr>
<tr><td colspan="2">TRKI 第1レベル以上の語彙（辞書形で表示）
第1レベル語彙：
покупатель, прогулка, рынок, ряд, соус, товар, фестиваль, храм, эпоха
第2レベル以上の語彙：
аксессуар, безопасность, бусина, высота, лар, душа, залив, изготовление, изделие, икра, кальмар, каштан, конвейера, лапша, лента, лосось, морепродукты, набережная, образ, основа, период, площадка, подушка, покупка, процветание, руина, сладость, статуя, стоянка, туризм, упоминание, фасоль, фигур(к)а, эра
日本語由来と思われる単語：
мисо, раме/эн, раме/энная</td></tr>
<tr><td>形容詞（計56語）</td><td>語彙のカバー率（固有名詞を除く）
TRKI初級レベル　77%
TRKI基礎レベル　85%</td></tr>
<tr><td colspan="2">TRKI 第1レベル以上の語彙（辞書形で表示）
第1レベル語彙：
древний, свежий, торговый, специальный
第2レベル以上の語彙：
гулиняный, конвейерный, кондитерский, коронный, местный, насыщенный, обзорный, питательный, продуктовый, сувенирный, фирменный, художественный</td></tr>
</table>

動詞（計130語）	語彙のカバー率（固有名詞を除く） TRKI初級レベル　60% TRKI基礎レベル　70%
TRKI 第1レベル以上の語彙（辞書形で表示） 第1レベル語彙： благодарить, двигаться, захотеть, интересовать, наступить, открываться, положить, попробовать, посетить, проводить, провозить, узнать, сфотографироваться, снять 第2レベル以上の語彙： длиться, изготовить, накладывать, насладиться, отправиться, помолиться, примерить, рекомендовать, славиться, ходить-сходить	
副詞（95語/内，述語副詞が18語）	語彙のカバー率（固有名詞を除く） 述語副詞：TRKI初級レベル　100% その他の副詞：TRKI初級レベル　82% TRKI基礎レベル　91%
TRKI 第1レベル以上の語彙（辞書形で表示） 第1レベル語彙：постоянно, прежде, затем　　第2レベル以上の語彙：настолько, примерно	
その他（代名詞，数詞，接続詞，前置詞等，計270語）については本研究では省略	

上の表が示す通り，副詞と形容詞は比較的高いカバー率を示しており，名詞と動詞は初級レベルで60%代，基礎レベルで70%である．第１レベル以上の語彙リストを見ると，特に名詞については回転寿司や縄文時代など地元の文化をロシア語で説明するために必要な語彙（e.g., бусина, конвейеры）と日本語の単語（e.g., мисо, рамэн）を借用したものが比較的多く使われた傾向が見られる．動詞については，例えば славиться や сходить, рекомендовать など，ロシア語の教科書でも上級になるまで導入されないが日常会話ではよく聞かれる語彙が用いられていた．これは，ネイティヴ教師がテクスト作成の指導にあたった結果，より「ロシア人が話すような」ロシア語に近い，オーセンティックなテクストが生まれたのだろう．

発表テクストは，全て基礎レベルまでで想定されている構文で構成されている．大部分は単文が用いられており，複文の場合でも並列複文や поэтому を用いる従属複文で，それ以外では関係代名詞 который と関係副詞 где を用いた従属複文がそれぞれ一度用いられているのみである．名詞と形容詞の格変化については，TRKIでは初級レベルで単数形の格変化，基礎レベルで複数形の格変化を学習するようにすすめられている．発表テクストの中では，単複の格変化が広く使われており，特に形容詞と名詞からなる名辞句の格変化も計9回用いられていた．動詞については，第１レベルで想定されている被動形動詞過去形を使った受動構文が一度使われていたが，後は全て基礎レベルでカバーされる文法項目が用いられていた．特に，мочь や можно を伴って動詞不定形が多用されており，動詞活用の負担が軽減されている．

以上より，本報告で取り上げたプレゼンテーションで生徒たちが産出したロシア語テクストは，町紹介というテーマ，語彙と文法項目のカバー率の点で，概ねTRKIで想定されている基礎レベルの言語到達度の範囲内に収まっていると考えて良いと思われる．特に名詞の複数形の格変化の導入が初級レベルでは想定されていないが，だからといって単数形の格変化のみで通常の言語活動が遂行できるとは考えにくい．使用が必要な場面において，フレーズのかたまりとして丸覚えする，当該格変化形を見て理解できる，あるいは変化させることまでできる，等どの程度まで習得

することを学習者に求めていくのか検討する必要があるだろう．語彙のカバー率については，例えば読解やリスニングで求められるような内容理解のためには95%以上のカバー率が必要であると言われており (e.g., Laufer 1992; Laufer & Ravenhorst-Kalovski 2010)，TRKIでは99%という高い割合を提案しているが，プレゼンテーションの場合はその限りではない．プレゼンテーションという言語活動には，テクスト作成時の辞書を使用，教師らによる添削，完成原稿の口頭練習などが含まれるからである．したがって，語彙の選択については，ロシア語能力の到達度レベルとテクストの authenticity とのバランスを考慮する必要があるが，後者を適宜優先させることで，より自然なロシア語の習得につながると思われる．

III-2. CAF分析

最近の第2言語習得理論（SLA）研究の成果より，学習者言語を複雑さ（complexity），正確さ（accuracy），流暢さ（Fluency）から評価するCAF分析が開発され，より多角的に言語習得過程を理解することができるようになってきている (e.g., Ellis & Barkhuizen 2005; Larsen-Freeman 2009). Ellis & Barkhuizen (2005) に従って行ったCAF分析の結果を以下に示す.

正確さ（accuracy）については，対象のデータがプレゼンテーション用の発表原稿であり，教師による添削指導が十分に施されたため，文法上の誤り（error）はみとめられなかった．次に流暢さ（fluency）について，以下表2に整理する．

表2. 流暢さ（fluency）

測定方法	数値
— スピーチの速さ（一分間に発せられた音節の数） — ポーズの回数（1秒以上のポーズの回数） — ポーズの長さ — ポーズなしに産出できる長さ（ポーズからポーズまでに含まれる音節の数の平均）	141音節 15分24秒中計12回 15分24秒中31.5秒 N/A
— 不完全文の数 — 同じ箇所を繰り返した箇所の数 — 言い換えをした箇所の数 — 他の語彙に言い直した箇所の数	0 6 0 2

続いて，複雑さ（complexity）については，表3をご覧いただきたい．これらの特徴はテクストに現れている複雑さの一部を示したのみである．例えば，語彙の複雑さについては，用いられている語彙の意味的な抽象度（抽象名詞がどの程度用いられているのか）見ることもできるし，形態的，統語的複雑さについても，より多くの文法形式を分析で取り上げることによって，より具体的な全体像が掴めるであろう．

表3. 複雑さ（complexity）

測定方法	数値
― 語彙的複雑さ 語彙の種類の数/全語彙数（固有名詞，ラーメン，寿司など日本語の単語をそのまま使っている単語は除く）	378/614=0.62
― 形態的複雑さ 例）形容詞と名詞からなる名辞句の格変化の箇所	2箇所
― 統語的複雑さ 従属文の出現率（節の数/AS-Unit*の数）	127/114=1.114

* 一人の話者によって発せられた，主節のみ，あるいは主節と従属節から成る単位を指す (Foster, Tonkyn, & Wigglesworth 2000: 365).

以上より，本プロジェクトの活動の一環で生徒たちが自分たちの町についてロシア語で実際にプレゼンテーションをした際の彼らの学習者言語を，CAF分析を用いて多角的に調査した．本プレゼンテーションで見られた生徒たちの学習者言語は，総じて文法的に正確で，ポーズも平均して1分間に1度以下しか起きていないことから，流暢さも確保されている一方で，語彙的，形態的，統語的に複雑な表現の使用は多くなかったことが明らかになった．すなわち，できるだけ平易なロシア語で，正確に流暢に話していたということである．今後は，これらの数値をより客観的に検討するために，ネイティブスピーカーやTRKIの初級レベルや基礎レベルの学習者との比較が必要になるであろう (Pelotti, 2009).

Ⅳ．おわりにかえて

本報告では，プロジェクト型授業において産出される学習者言語を，TRKIで想定されているロシア語能力レベルとの相関性を検討した上で，CAF分析を行って，その特徴を明らかにした．その結果，プレゼンテーションで生徒たちが産出したロシア語は，町紹介というテーマ，語彙と文法項目のカバー率の点で，概ねTRKIで想定されている基礎レベルの言語到達度の範囲内に収まっていることが明らかになった．また，自分たちに身近な内容をテーマとし，平易なロシア語で正確にそして流暢に話し，ロシア人に伝わりやすいプレゼンテーションを心がけていたことも示され，客観的評価への対応も期待できるプロジェクト型授業が可能であることが示唆された．

言語形式の習得にのみ集中するよりもコンテクストの中で学習した方が実際の言語習得には効果的であることはすでに1970年代に実証されており(e.g., Savignon 1972), 言語習得のみを目的にした単なることば活動ではなく，社会やコミュニティの中で多様な人々とロシア語を使って実際に関わっていく具体的なことばの経験を積み重ねることで，結果的には言語習得自体もより豊かに実るということである．今後，プロジェクト型授業を進めていくにあたって，教師が日々の授業の中でも容易に活用できるような分析方法の確立が求められる．

（よこい　さちこ　大阪大学）

〈参考文献〉

Андрюшина, Н. П. (ed.). (2011). Лексический минимум по русскому языку как иностранному. Второй сертификационный уровень. Общее владение (3-е изд.). СПб: Златоуст.

Андрюшина, Н. П. (ed.). (2013). Лексический минимум по русскому языку как иностранному. Первый сертификационный уровень. Общее владение (6-е изд.). СПб: Златоуст.

Андрюшина, Н. П. и Козлова, Т.В. (eds.). (2011). Лексический минимум по русскому языку как иностранному. Базовый уровень. Общее владение (4-е изд.). СПб: Златоуст.

Андрюшина, Н. П. и Козлова, Т.В. (eds.). (2012). Лексический минимум по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень. Общее владение (4-е изд.). СПб: Златоуст.

Ellis, R. & Barkhuizen, G. (2005). *Analysing learner language*. Oxford University Press.

林田理惠（2009）「ロシア教育省『ロシア語能力検定試験』の概要･現状と課題」『到達度評価制度構築のための『国際基準』に準拠したロシア語総合試験開発』, 科学研究費補助金　基盤研究(C) 研究成果報告書, pp. 2−29.

林田理惠（2014）「ロシア語教育実情調査――将来的展望と中等•高等教育機関連携の可能性――」『複言語･多言語教育研究』第2号, pp. 60−71.

国際文化フォーラム（2016）『CoReCa 2015−2016』東京：公益財団法人国際文化フォーラム

Kumaravadivelu, B. (1994). The postmethod condition: (E) merging strategies for second/foreign language teaching. *TESOL quarterly*, *28*(1), 27−48.

Kumaravadivelu, B. (2001). Toward a postmethod pedagogy. *TESOL quarterly*, 537−560.

Kumaravadivelu, B. (2006). *Understanding language teaching: From method to postmethod*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Larsen-Freeman, D. (2009). Adjusting expectations: The study of complexity, accuracy, and fluency in second language acquisition. *Applied linguistics*, *30*(4), 579−589.

Laufer, B. (1992). How much lexis is necessary for reading comprehension?. In *Vocabulary and applied linguistics* (pp. 126−132). Lonson: Palgrave Macmillan.

Laufer, B., & Ravenhorst-Kalovski, G. C. (2010). Lexical threshold revisited: Lexical text coverage, learners' vocabulary size and reading comprehension. *Reading in a foreign language*, *22*(1), 15.

文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領（平成21年度）』

Pallotti, G. (2009). CAF: Defining, refining and differentiating constructs. *Applied Linguistics*, *30*(4), 590−601.

Pennycook, A. (1989). The concept of method, interested knowledge, and the politics of language teaching. *TESOL quarterly*, *23*(4), 589−618.

Savignon, S. J. (1972). *Communicative competence: An experiment in foreign-language teaching* (Vol. 12). Marcel Didier.

臼山利信（2000）「高等学校におけるロシア語教育の現状と課題」『ロシア語ロシア文学研究』第32号, pp. 179−193.

臼山利信（2003）『中等教育における英語以外の外国語教育に関する調査研究――ロシア語教育を中心として――』筑波大学現代語･現代学系

ロシア語教育の高大連携の現状と課題
――札幌大学の事例をもとに――

高橋　健一郎

Ⅰ．札幌大学におけるロシア語教育の高大連携の取り組み

現在，全国でロシア語教育を行っている高校はかなりの数に上るが，高校におけるロシア語教育の課題の一つに，教員の確保の問題がある．例えば，依田幸子によれば，北海道の高校でのロシア語教育の課題として，「①ハードを固める方が先に立ってしまい，教員の確保や授業の充実というソフト面が後付けになってしまう　②多い学校でも週5単位なので，専任の教員を配置することが不可能．他教科の教員がロシア語も担当するか，外部講師を依頼している　③市立函館のように，極東大学から派遣する，という約束を結んでいる場合もある．ただし，現在，市立函館ではロシア語履修者ゼロの現状である　④どこも予算配分が厳しく，その中での講師依頼であるが，教員免許を持たない人や教えた経験の全くないネイティブもいる」という四点が挙げられる(1)．これらはほとんどすべて教員の確保の問題である．

その課題に対して，高大連携は有効な解決策の一つであろう．通常の科目であれば，高校と大学では受講生の基礎知識が大きく異なるために，大学教員が高校生相手に授業をする際に困難が生じるものだが，ロシア語に関しては，大学でも基本的には初心者に一から教え始めるものであり，教える項目については高校と大学の間で大きな差がないため，大学教員も高校生相手に比較的大きな問題なく指導が可能である．また，近年大学は「地域共創」の実践が強く求められているが，ロシア語の高大連携事業は，地域共創のための事業の一環としても位置付けられるものであり，その点でも，高大連携は積極的に行われる意味がある．

本報告では，ロシア語の高大連携事業を行っている札幌大学の事例を概観し，その現状と課題について述べてみたい．

札幌大学では，現在ロシア語教育に関連して，札幌丘珠高校と札幌新陽高校の2校と高大連携の事業を行っている．札幌丘珠高校とは，「地域文化研究」という枠組みで，様々な地域の中の一つとしてロシアの文化，社会に関する出前講義を札幌大学が行っている．なお，札幌丘珠高校では高校の教諭による自前のロシア語教育が行われており，札幌大学はロシア語の教育そのものに関しては直接は関わっていない．

一方，札幌新陽高校においては，「ロシア語入門」という科目を札幌大学の教員が担当し，およそ8か月にわたって，ロシア語の授業と様々なアクティビティを提供している．2017年度の受講生は15人で，次のような授業やアクティビティが行われた．

まず，ウラジーミル・ジダーノフ札幌大学地域共創学群教授によるロシア語会話の授業が全11回（6月5日，7月3日，9月4日，9月11日，9月25日，10月2日，10月30日，11月13日，11月27日，12月4日，12月11日）．1回の時間は15時50分から16時40分までの50分間で，場所は札幌新陽高校である．授業実施日を見て分かるように，初めの3回は，1か月から2か月間隔が空いてしまっており，実質的には9月から12月にかけて1–2週間に1回のペースで実施されたと言ってよい．

(1) 依田幸子「北海道の高等学校におけるロシア語教育」『平成23年（2011年）度－平成27年（2015年）度 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果最終報告書 大学間・高等学校－大学間ロシア語教育ネットワークの確立』2016年, 11頁.

使用教科書は『テレモーク』である．2006年度と2007年度に，北海道教育委員会が，文部科学省より「外国語教育多様化推進地域事業」の指定を受け，ロシア語教育の推進を図るために「北海道ロシア語教育推進連絡協議会」を立ち上げ，事業を推進したが，そのときに作成されたのが『テレモーク』である．上記のとおり，この授業は1–2週間に1回のペースで，全11回のみの授業のため，教科書全体を学習することはできず，学習できた範囲はごくわずかである．

ロシア語の授業以外に，札幌大学の日本人教員（岩本和久，大矢温，山田隆，高橋健一郎，いずれも札幌大学地域共創学群教授）によるロシアの文化や社会に関するレクチャーが全4回実施された．1回の時間は16時から17時30分までの90分間で，場所は札幌大学である．

その他，10月7日に札幌大学において「ロシア詩の集い」が開催され，そこに札幌新陽高校の生徒にも参加してもらったほか，12月16日にやはり札幌大学で開催された「ヨールカ祭」（ロシアの新年を祝うお祭り）にも参加してもらった．前者では客席で見学してもらっただけだが，後者では，ロシア語による寸劇「大きなかぶ」を受講生全員で演じてもらった（写真1参照）．また，全体の講座の締めくくりとして，1月22日に札幌新陽高校において調理実習が行われ，ジダーノフ教授の指導のもと，生徒たちがロシア料理の「オリビエサラダ」を作り，試食した（写真2参照）．さらに，12月2日に開催された「第49回全道ロシア語弁論大会」（日本ユーラシア協会北海道連合会，サハリン州政府共催）に新陽高校の生徒が出場し，そのスピーチのテキストのロシア語訳や発音指導などを札幌大学の教員が行うなど，高大連携事業は札幌大学や札幌新陽高校における行事以外にも拡大している．

このような札幌大学のロシア語教育の高大連携は10年以上の実績がある．高校でこの授業に参加した者の中から札幌大学のロシア語専攻に進学する者も2–3年に一人程度の割合で存在する．彼らは，他の入学者と一緒に，再び一からロシア語やロシア社会に関する授業を受け始めることになる．



写真1



写真2

Ⅱ．札幌大学におけるロシア語教育

ここで，札幌大学におけるロシア語教育について簡単にまとめておこう．札幌大学は現在，1学群制をとっており，地域共創学群の中にロシア語専攻が存在する．そのほかに，一般教養科目（基盤教育科目）としてロシア語科目も開設されているが，本報告では，専門科目についてのみ記述する．

現在，札幌大学には1学年およそ10数人のロシア語専攻生がおり，基本的に1年次から4年間のカリキュラムでロシア語の学習を進めていく．札幌大学では「レイターマッチング」という制度を設けており，専門を決めずに入学することも可能であり，その場合2年次から専攻に所属することになる．あるいは，入学時に所属した専攻を，2年次に進む際に変更して，ロシア語専攻に移るこ

とも可能である．しかし，ロシア語専攻では他の大部分の専攻と異なり，1年次からロシア語，ロシア社会に関する専門科目の教育が本格的に始まるため，ほとんどの学生が1年次からロシア語専攻に所属している．

1年次の春学期には，日本人教員が初歩のロシア語文法を教える「ロシア語入門Ⅰ」（週5コマ）と，ネイティブ教員による「基礎ロシア語Ⅰ」（週2コマ）の計7コマ（1コマ90分，以下同様）を通して集中的なロシア語の初歩教育が行われ，秋学期も同じコマ数の授業が展開される（ただし，科目名は「ロシア語入門Ⅱ」と「基礎ロシア語Ⅱ」）．こうして，1年間でロシア語の初等文法の教育を終える．また，その他「ロシア事情Ａ」（春学期）と「ロシア事情Ｂ」（秋学期）という講義も必修科目として開講され，「Ａ」ではロシアの社会や歴史，文化などについて幅広く学び，「Ｂ」ではロシア文学史を中心に学ぶ．

2年次では，春学期は「ロシア語文法」（週2コマ），「ロシア語演習Ⅰ」（週2コマ），「ロシア語会話Ⅰ」（週2コマ），「ロシア語発展演習Ａ」（週2コマ），秋学期は「ロシア語作文」（週2コマ），「ロシア語演習Ⅱ」（週2コマ），「ロシア語会話Ⅱ」（週2コマ），「ロシア語発展演習Ｂ」（週2コマ）のように，各期とも週8コマの授業展開がある．これらの科目のうち，「ロシア語発展演習Ａ・Ｂ」は特に高度なロシア語の読解を目指す2年次生向けの科目だが，それ以外のすべての科目は，事実上ほぼ全員が履修するため，2年次には各学期とも週に6〜8コマのロシア語の授業が展開されることになる．

上記の2年間の学習により，ロシア語の基礎を固めた後は，3–4年次には，「ロシア文学研究」や「ロシア語作文研究」，「現代ロシア語表現研究」，「ロシア語学研究」，「ロシア外交論」，「ロシア史」など，より高度な様々な授業，講義を比較的自由に履修すると同時に，ゼミナールに必ず所属し，ロシア語力を高め，またロシアに関する専門的な学知を深めていく仕組みになっている．

Ⅲ．高大連携の問題と課題

高大連携事業で授業を受けた高校の生徒が札幌大学のロシア語専攻に進学するメリットとしては，ロシア語やロシアに関する知識がすでに少し身についている点は当然だが，また，キャンパスの雰囲気をすでに知り，高校の授業時と同じ教員から授業が受けられるために，余裕をもって授業を受けられる点が挙げられよう．さらに，学内のロシア関連のイベントにすでに参加したことがあるために，1年次から積極的に関わり，リーダーシップを発揮してくれることも期待される．

しかしその一方で，逆に，はじめのうちに学習が易しいと感じた既習生が油断し，勉強を怠けてしまうというケースも無いわけではない．高校で学んだロシア語の知識はごくわずかで，大学の専門教育では一か月ともたないため，高校で勉強したことが逆に仇となってしまうのである．

また，これらのメリット，デメリットの大部分は，高大連携事業に参加した者だけでなく，他の高校で自前のロシア語教育を受けてきた入学者にも当てはまるものである．その学生たちの入学時のロシア語の習熟度は様々で，関東国際高校のようにかなりの時間をロシア語学習に割いている高校の出身者の場合は，札幌大学入学時に初めから2年次のクラスで履修させるなどの措置をとったこともあるが，その他のほとんどの場合は，特別な措置はとらず，他の学生たちと同じように学習を進めていく．

このように，多くの場合，高大連携のメリットは当然大きいものの，現実的にはそのメリットが積極的に生かされていないことが多く，さらにデメリットを生むことすらあるのが現状である．現在のところ，既修者向けの新しいカリキュラムを作る余裕はないものの，例えば，大学入学後に個別に特別な課題を与えて学習指導するなどの工夫や，また，高校までの学習経験を活かすよ

うな発表を大学のクラスでさせたり，出身高校とのパイプ役を担わせるなど，モチベーションを保たせる工夫が必要となるだろう．

高大連携事業で直接接している高校の生徒だけでなく，他の高校のロシア語学習者に関しても，その高校との積極的な情報交換を通して，より効果的な高大の接続が図れるよう最善策を模索していきたい．

（たかはし　けんいちろう　札幌大学）

日露で互いのことばを学ぶクラスをつなぐ

水口　景子

Ⅰ．日本のロシア語教育とロシアの日本語教育

私が所属する公益財団法人国際文化フォーラム（TJF）は，2015年度から日本のロシア語教育をサポートする事業を始めた．それまで日本の高校の中国語教育と韓国語教育をサポートする事業を実施してきたTJFがロシア語教育のサポートをはじめたきっかけは，本研究のリーダーである大阪大学大学院の林田理惠教授と，運営指導委員である大阪大学の横井幸子准教授がロシア語教育における高大連携のための研究に取り組んでいたことにある．

今回，大阪大学が申請し本事業には，財団として協力するとともに，私が運営指導委員として加わらせてもらった．事業の名称は「外国語教育強化地域拠点事業」であり，もともとの主旨は，一つの地域（＝自治体）内で英語以外の外国語教育を研究することが想定されていたはずだ．しかし，研究指定されたロシア語教育実施校4校の所在地は，北海道，青森，富山，東京とばらばらだ．林田教授の専攻調査およびTJFが2015年度から収集してきた情報を総合すると，2016年3月現在，ロシア語教育に取り組んでいる高等学校は約30校ある．

ロシア語教育を実施している高等学校および高等専門学校

地域	学校名	地域	学校名
北海道(10)	北海道札幌丘珠高等学校	新潟県(3)	新潟県立小千谷西高等学校
	北海道札幌国際情報高等学校		新潟県立三条商業高等学校
	北海道石狩翔陽高等学校		新潟市立明鏡高等学校
	北海道有朋高等学校	富山県(3)	富山県立伏木高等学校
	北海道余市紅志高等学校		富山県立志貴野高等学校
	北海道旭川南高等学校		富山高等専門学校
	北海道根室高等学校	茨城県(1)	茨城県立茎崎高等学校
	北海道根室西高等学校	埼玉県(3)	私立・早稲田本庄高等学院
	札幌市立札幌大通高校		私立・慶應義塾志木高等学校
	私立・札幌新陽高校		私立・立教新座高等学校
青森県(1)	青森県立青森南高等学校	東京都(4)	東京都立北園高等学校
秋田県(2)	秋田県立能代松陽高等学校		私立・関東国際高等学校
	秋田県立角館高等学校		私立・早稲田大学高等学院
山形県(2)	山形県立鶴岡中央高等学校		私立・創価高等学校
	山形県立酒田光陵高等学校	神奈川県(1)	神奈川県立秦野総合高等学校

ロシア語教育を実施している学校は，北海道に最も多く，東北・北陸の日本側に集中していることがこの表からわかる．北海道は歴史的に見てもロシアと関わりが深く，交流や貿易の面でも交流は活発である．ロシアの州や都市と姉妹都市提携している道内の市町村数2015年12月末現在17と日本で最も多い(1)．新潟市はハバロフスク，ウラジオストク，ビロビジャンというロシアの3

(1) http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tsk/H27shimai-kuni.pdf

つの姉妹都市があり，新潟とロシア極東のウラジオストク，ハバロフスクを直接結ぶ夏季限定のプログラムチャーター便が運航されているなど，経済，観光，友好交流を強化したいとの考えが見える．

富山県を見てみると，県立伏木高等学校の国際交流科では，選択必修科目の第二外国語としてロシア語，中国語，韓国語が設置されている．この背景には，富山県が環日本海諸国等との経済，文化，学術涛の交流を盛んに行っていることがある．

一方，ロシアの初等中等教育における日本語教育の状況はどうなっているのか．国際交流基金の「日本語教育 国･地域別情報」によれば，ロシアの中等教育における日本語教育の位置づけは多くの場合，音楽，美術等と同様の選択科目である．日本が隣国であり，また，マスメディアを通じてアニメ等の日本の文化，産業・技術等が知られていることから，選択理由は子ども自身によるもの，保護者によるものとさまざまのようだ．

TJFが実施した日露交流プログラムに参加したロシアの日本語教師に聞いてみると，日本語を学んでいる生徒の選択動機はアニメなどの日本文化が好き，日本人の考え方が好き，日本に住んでみたいなどの答えが返ってくるという．

広いロシアで日本語教育の拠点の役割を実施している都市は，ヨーロッパに近い地域としては，モスクワとサンクトペテルブルクが，シベリア地方ではノボシビルスクが，極東ではウラジオストク，ハバロフスク，ユジノサハリンスク等であるといえる．

国際交流基金の調査とTJFが収集した情報を総合すると，ロシアで日本語教育を実施している初中等教育機関は約30．規模としては日本のロシア語教育とほとんど変わらない状況だといえる．

Ⅱ．日露の教師をつなげる試み

本研究でも，異文化交流事業を授業に積極的に取り入れることを目標としている．TJFもことばの学びと交流をつなげることをめざし，これまで日本にとって隣国である中国，韓国との間で互いのことばを教える教師たちをつなぎ，生徒たちのことばの学習への動機を高め，相互理解を深めるプログラムを実施してきた．

ロシアも日本にとっては隣国である．若い世代がお互いのことばや文化を学び，交流を通じて理解を深めることは，友好関係を発展させ，様々な面で協力しあえる人材の育成につながると考えている．

日本とロシアの初等中等教育において互いのことばを教える教師，互いのことばを学ぶ同世代の交流を通じて，効果的にことばの学習と文化理解を促進し，日本とロシア間の人的ネットワークを作ることができると考え，以下のプログラムを実施してきた．

◆2015年度　モスクワ，ノボシビルスクの小中高校日本語教師を招聘し，交流プログラムの一部として東京にて日露教師合同研修を実施
◆2016年度　日本の高校ロシア語教師と学習者をモスクワとノボシビルスクに派遣し，交流プログラムの一部としてモスクワにて日露教師合同研修を実施
◆2017年度　モスクワ，ノボシビルスク，サンクトペテルブルク，ペルミの中高校日本語教師と学習者を招聘し，交流プログラムの一部として日露教師と学習者の合同合宿を行い，日露教師が寝食を共にしながら，ぞれぞれの課題に特化した個別研修を実施

3年間にわたる交流を通じ，日露教教師間の個人的な理解がいっそう深まっており，自分たちの

授業にこの交流を生かせないかと考え始めている教師もいるが，日頃の教室実践に計画的に交流を取り入れるまでにはつながってはいない．今回，ロシアの日本語学習者とつながる試みをしている学校もあり成果が出ているが，これを他の学校に広げていくためには，何らかの枠組みが必要だと考える．

こうした状況を踏まえ，TJFは2018年度に，日露間でことばや文化の学びと交流を結びつけた教育実践につなげることをめざしたプロジェクトを実施することにした．プロジェクトへの参加を希望する日露の教師は，それぞれ自分たちで交流相手を探しペアを組む．その後は，メールやテレビ会議を活用して，交流を取り入れたロシア語，日本語授業の年間カリキュラムを作成し実施に移していく．

本事業に参加した学校でロシア語を教えている教師の中にも，本プロジェクトに参加し，ロシアの日本語のクラスと交流をとりいれ11月には日露8ペアの教師がサンクトペテルブルクに集まり，それぞれのペアが実践報告し，他のペアのフィードバックを得てプログラムのバージョンアップをめざす．このプロジェクトでできあがったカリキュラムは，今後日本でロシア語教育を実施している学校，ロシアで日本語教育を実施している学校の参考となり，本研究がめざしている異文化交流事業を取り入れた日本の高校のロシア語の授業づくりにも貢献すると確信している．

（みずぐち　けいこ　公益財団法人国際文化フォーラム）

Посещение уроков и их анализ как путь к повышению уровня преподавания

Казакевич Маргарита

Важной для меня частью проекта было посещение уроков русского языка в нескольких старших школах (Тояма, Токио, Саппоро, Аомори), анализ увиденных уроков, разговоры с учениками в ходе урока или после него, беседы и переписка с учителями. Поэтому прежде всего хочу поблагодарить коллег-учителей за открытость, за желание обмениваться опытом и учиться. А также хочу сказать спасибо их ученикам: они не боялись разговаривать с иностранкой, они хотели общаться и могли это сделать по-русски, хотя и с трудом.

Всего мне удалось поближе познакомиться с 5 школами и услышать презентации ещё 2 школ. Все эти школы показались мне и разными, и похожими. Возможно, по этим школам можно представить себе ситуацию и в других старших школах, где в программе есть уроки русского языка как второго иностранного.

Общие для старших школ проблемы с изучением русского языка не являются секретом, они стали очевидными и мне. Это малое количество уроков в неделю; отсутствие или недостаток мотивации у школьников; большой разрыв между учениками в уровне овладения языком (что также связано с наличием/отсутствием мотивации); систематическое невыполнение домашних заданий учениками, из-за чего учителя перестают их задавать; иногда — большие классы (до 40 человек), иногда — отсутствие взаимодействия между учителем-носителем языка и учителем-японцем, иногда — отсутствие у школы точной цели преподавания русского языка, ясной и учителям, и школьникам. Есть и объективная общая проблема — особая трудность изучения грамматики на начальном этапе из-за богатой морфологии русского языка.

Однако сходство есть не только в проблемах, есть и общие достижения. Например, в этих школах у детей существует прекрасная возможность поехать в Россию, жить в русских семьях, учить там язык, пусть даже недолго. Кроме того, в свою очередь русские школьники приезжают в Японию в эти же школы в рамках обмена, живут в японских семьях. Такой шанс общения, подготовка к нему — очень важный фактор повышения мотивации. В доказательство можно привести слова учителей: «На 3 курсе, после поездки в Россию мотивация, к сожалению, падает» или «Дети сильно стараются, готовясь к этим мероприятиям, но после плачут от досады из-за своего русского языка. Я думаю, что именно это чувство недовольства - их мотив для изучения русского языка еще более серьёзно».

В школах в Токио детей мотивирует к изучению трудного русского языка возможность сдавать Общеяпонский экзамен по русскому языку, который ежегодно

проводится Институтом русского языка Токио. И некоторые учителя ставят своей целью подготовить детей к тесту 4-го или даже 3-го уровня. К сожалению, у школьников из других префектур такой возможности нет. Может быть, Институт русского языка Токио мог бы организовывать выездной экзамен в городах, где есть не одна школа с русским языком (например, в Саппоро) или мог бы предложить другой вариант для школ?

Из достоинств необходимо отметить и то, что в некоторых школах работают носители русского языка - учителя или ассистенты учителей. Насколько мне известно, ассистентов всего 2 на все старшие школы с преподаванием русского языка. Но если бы их было больше, эффективность обучения, с моей точки зрения, могла бы возрасти.

В беседах с учителями я задавала им одинаковый вопрос о том, как их школа видит цель обучения русскому и другим «вторым» языкам. Ответы формулировались по-разному, но были похожими по сути: создание 国際人; изучение языка и культуры стран-соседей; знакомство с другими культурами, расширение кругозора. Такая цель мне кажется благородной и — главное! — реалистичной, школы, которые я посетила, очевидно достигают этой цели: дети не боялись и не смущались, разговаривая со мной, большинство было заинтересовано в разговоре; по словам учителей, дети любят общаться с русскими сверстниками; живя в семьях в России, умеют установить языковой контакт; в одной из школ дети играют на балалайках и поют русские песни даже вне уроков русского языка.

Но, может быть, если бы школа уточнила и сузила свою цель с учётом конкретного языка, ввела бы в неё языковой фактор, сумела бы как-то обязать школьников выполнять домашние задания по второму языку, то это помогло бы учителям? Я очень хорошо понимаю, как это трудно! Но мне нравится парадоксальный лозунг студенческих волнений в Париже в 1968 году: «Будьте реалистами, требуйте невозможного!»

И сейчас я подошла к главному для меня в этом отчёте — к учителю. Все учителя, которые участвовали в проекте или с которыми я беседовала, оказались энтузиастами преподавания, любящими школу, детей, язык. Успех той или иной школы в области преподавания русского языка, с моей точки зрения, держится именно на учителях, иногда, возможно, вопреки сложившейся системе, которая не всегда помогает им (об общих проблемах см. выше).

Вместе с другими коллегами по проекту я посетила два открытых урока русского языка: в школе Окадама, Саппоро, и в школе Минами-Аомори, Аомори. После каждого урока состоялось обсуждение. Мы увидели два очень разных по замыслу урока: 1) презентация всего, чему школьники научились за год обучения русскому языку; 2) обычный, правильно построенный, с моей точки зрения, урок с участием ассистента-носителя языка. Это были хорошие уроки хороших учителей в хороших школах!

Первый урок показал нам, что в принципе год обучения русскому языку не прошёл для детей даром. Если учитель ставил своей целью научить школьников вести простейший диалог в рамках темы «Знакомство», то он достиг своей цели: мы смогли

познакомиться и немного поговорить по-русски с учениками в ходе урока. Если у учителя была цель показать учащимся некоторые стороны русской культуры, то и это ему удалось: вначале урока мы смотрели и слушали презентацию одного из учеников о его поездке на Сахалин (по-японски), а закончился урок общим исполнением песни по-русски и по-японски. Этот урок-презентация дал нам шанс оценить результат работы учителя и учеников за год обучения.

Второй урок предоставил нам другую возможность: мы смогли увидеть и проанализировать обычный школьный урок. Этот урок был методически правильно выстроен, имел коммуникативную направленность, при том что тема была грамматической (род имён прилагательных). Его особенность — активное участие ассистента-носителя русского языка и, что важно, хорошее взаимодействие учителя и ассистента. Урок дал нам, наблюдателям, хороший материал для анализа, и мы смогли глубоко обсудить его с точки зрения как достоинств (явных!), так и недостатков (небольших, исправимых!).

Для себя я анализировала урок по следующим критериям, и этот урок им в целом соответствовал.

1. Цель урока:
   а) она была достигнута? (полностью, частично, не достигнута)
   б) если цель не достигнута, то почему?

2. Структура урока:
   а) целесообразно ли преподаватель распределил время урока?
   б) какой элемент урока наиболее успешный или неудачный?
   в) оценить введение в урок и завершение урока

3. Система упражнений:
   а) соответствие цели урока
   б) уровень трудности (для группы в целом)
   в) порядок следования заданий (от простого к сложному, от тренировочных к условно-речевым и речевым)
   г) интерес для учеников
   д) новизна задания

4. Работа учеников:
   а) внимание, заинтересованность
   б) понимание
   в) активность
   г) коммуникабельность
   д) креативность (творческий подход к заданиям)

5. Манера преподавателя:
   а) речь на русском языке, её обучающая функция

б) способы исправления ошибок, их оправданность в ситуации

в) находчивость при внезапном изменении ситуации

г) «коммуникативность» поведения

д) индивидуально-направленное (личностное) общение с каждым учеником

е) контакт с группой (есть/нет? тактичность в общении? авторитарность? чрезмерная мягкость? сбалансированное общение?)

6. «Мелочи» преподавания:

а) система записей на доске

б) раздаточные материалы

в) использование технических средств обучения

Следование этим критериям кажется мне полезными и при подготовке урока учителем, и при анализе, оценивании урока наблюдателем.

Взаимное посещение уроков учителями, анализ и обсуждение увиденного, на мой взгляд, является прекрасным способом повышения уровня преподавания. Полезно смотреть уроки не только хорошие, но и средние, и даже неумелые, ведь можно учиться на ошибках друг друга, чтобы избежать собственных. С другой стороны, самому учителю не стоит стесняться и бояться делать свои уроки открытыми: взгляд со стороны помогает понять самого себя и поверить в себя.

Понимаю, что это не очень принято в Японии, не знаю, можно ли организовать это как некую систему, но подобный способ взаимообучения мог бы быть эффективным для учителей русского языка в старших школах.

（カザケーヴィチ　マルガリータ　富山大学）

地域に貢献するロシア語人材育成につながる
教育課程編成を展望した、
ロシア語学習指導案・評価法確立のための基盤研究
研究成果報告書

平成 29 年度
文部科学省外国語教育強化地域拠点事業
ロシア語班 研究成果報告書
平成 30 年 3 月 31 日発行

編集発行　大阪大学言語文化研究科　林田理惠研究室
〒562-8558　箕面市粟生間谷東 8-1-1
TEL 072-730-5317
印刷所　株式会社 遊文舎
〒532-0012　大阪市淀川区木川東 4 丁目 17 番 31 号
TEL 06-6304-9325